浅科村文化財調査報告　第９集

御馬寄古城跡

（みまよせこじょうあと）

――村道北－50号線道路改良工事に伴う発掘調査――

１９９６

浅科村教育委員会

序

浅科村には、縄文時代から中世にわたる埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が、現在までに57か所確認されています。人々は、豊かな自然環境に恵まれ、古来より生活の営みの中で文化を育んできました。

近年の上信越道の開通により、様々な開発の波が当村にも及びつつあり、地下に埋もれた貴重な文化財も、危機にさらされはじめました。

浅科村教育委員会では、こうした貴重な文化財が所在する場所で開発が行われ、現状を保存できない場合には、発掘調査を実施して、その記録を後世に残しています。

今回の発掘調査は、北陸新幹線建設に伴う取り付け道路建設による緊急調査として実施しました。当初は「御馬寄古城」の伝承地として、城郭遺構が検出されると予想していましたが、発掘の結果、縄文時代の土器や石器、弥生時代の竪穴状遺構などが検出され、原始時代の浅科村を物語る貴重な成果と言えましょう。

本報告書は、発掘調査内容及びその成果を、図版を付してまとめたものです。本書が教育、文化、学術研究の一助として多くの人々に活用され、また、村民の皆さんが埋蔵文化財に対して関心と理解を深める手引きとなれば幸いです。

平成８年10月

浅科村教育委員会
教育長　柳澤哲郎

例　　言

1　本書は、長野県北佐久郡浅科村に所在する、「御馬寄古城跡」発掘調査の調査報告書である。

2　発掘調査は、村道改良工事に伴う事前の記録保存のために、浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎）が主体となり、次のように実施した。

遺跡名：御馬寄古城跡

発掘調査期日：平成５年９月13日～同年10月31日

発掘調査地：長野県北佐久郡浅科村大字御馬寄字田中島

発掘調査面積：2,500㎡

発掘調査組織：御馬寄古城跡発掘調査団（団長：柳澤哲郎）

発掘担当者：上代　純一（國学院大學歴史考古学会部長）

3　現地の発掘調査、遺物整理・報告書刊行事業は、次のように実施した。

平成５年９月～10月……現地での発掘調査

平成８年３月～８月……遺物の洗浄・注記・図面類の整理・遺物の復元・実測・トレース

平成８年９月……図版作成・原稿執筆

4　現地での写真撮影は國学院大學歴史考古学会、出土遺物の写真撮影は、小宮山克己が行った。

5　出土遺物の復元は、小宮山が行った。

6　遺構のトレース、出土遺物の実測及びトレースは、小宮山が行った。

7　図版作成は、小宮山が行った。

8　本書の挿図の縮尺は、各々挿図に示した通りである。

9　挿図中の水糸標高値の単位はメートルである。

10　本書の執筆は、浅科村教育委員会、小宮山が行った。

11　本書の編集は、浅科村教育委員会が行った。

12　出土遺物・図面・写真類は、浅科村教育委員会で保管している。

13　本書をまとめるにあたり、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝します。

高林重水・金井　靖・岡田　裕・櫻木悦子・鈴木徳雄（敬称略）

長野県教育委員会・浅科村役場建設課

目　　次

序
例　言
目　次

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
〔1〕発掘調査に至る経過……1
〔2〕発掘調査組織……2
〔3〕発掘調査の経過……2
〔4〕調査区の概要……2

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……4

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物……7
〔1〕A区の調査……7
(1)　表土層出土の遺物……7
(2)　竪穴状遺構……9
(3)　土　壙……12
(4)　ピット……12
〔2〕B区の調査……14
(1)　概　要……14
(2)　礫　群……14
(3)　出土遺物……14

第Ⅳ章　総　　括……20

図　版

挿図目次

第1図　遺跡位置図（1/25,000）……1
第2図　遺跡付近図（1/1,000）……3
第3図　グリッド配置図（1/500）……3
第4図　周辺遺跡分布図（1/25,000）……6
第5図　A区全体図（1/250）……8
第6図　A区表土層出土遺物（1/3）……8
第7図　第1号竪穴状遺構実測図（1/60）…9
第8図　第1号竪穴状遺構出土遺物(1/3）…9
第9図　第2号竪穴状遺構実測図（1/60）…9
第10図　第2号竪穴状遺構出土遺物(1/3）…10
第11図　第3号竪穴状遺構実測図（1/60）…10
第12図　第3号竪穴状遺構出土遺物(1/3）…11
第13図　第4号竪穴状遺構実測図（1/60）…11
第14図　第4号竪穴状遺構出土遺物（1/3）…11
第15図　第1号土壙実測図（1/60）……12
第16図　第2号土壙実測図（1/60）……12
第17図　第3号土壙実測図（1/60）……12
第18図　ピット1～9実測図（1/40）……13
第19図　B区全体図（1/100）……15
第20図　B区土層断面図（1/40）……16
第21図　B区出土遺物(1)（1/3）……17
第22図　B区出土遺物(2)（1/3）……18
第23図　中世土鍋の口縁部形態分類図……21

表目次

第1表　周辺遺跡地名表……6
第2表　ピット観察表……13

図版目次

図版1　遺跡近遠景
図版2　A区全景
図版3　第2号土壙・第4号竪穴状遺構
図版4　B区全景
図版5　B区全景
図版6　A区表土出土遺物・第1号竪穴状遺構出土遺物
図版7　第2号竪穴状遺構出土遺物・第3号竪穴状遺構出土遺物・第4号竪穴状遺構出土遺物
図版8　B区出土遺物(1)
図版9　B区出土遺物(2)
図版10　B区出土遺物(3)

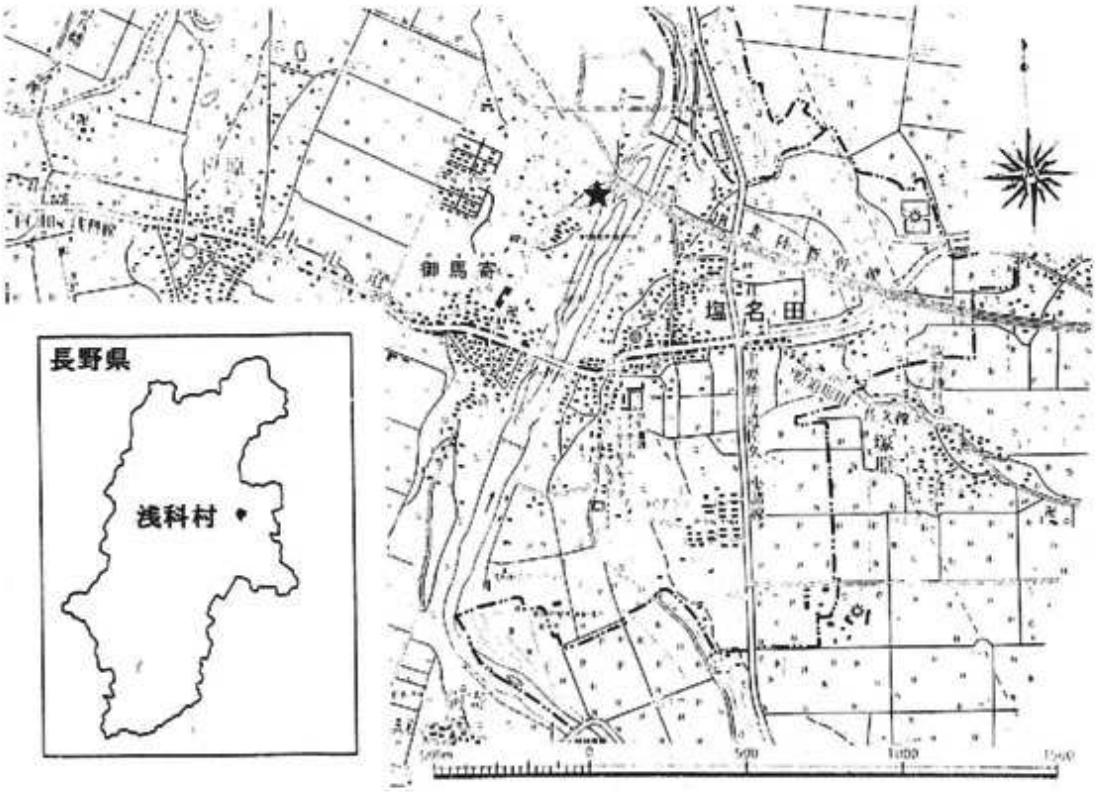
第Ⅰ章　発掘調査の概要

〔1〕発掘調査に至る経過

平成4年、御馬寄古城跡を通過する村道の改良工事計画が具体化した。これは、御馬寄古城の東寄りから十二川原地区の下水道処理場に至る村道で、工事実施に当たっては、村道改良工事によって御馬寄古城の一部が破壊されるため、浅科村教育委員会では文化財保護の観点から、事業主体者である浅科村に対し、文化財の取扱いに関する協議が必要であると伝えた。

これを受けて、浅科村、浅科村教育委員会、浅科村文化財保護委員会の三者による事前協議を行い、村としては、事業の計画変更ができないことから、工事実施に際しては、事前に記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、発掘調査は浅科村教育委員会が主体となって実施することとした。

文化財保護法に基づく法的手続きを行った後、平成5年9月13日から発掘調査を実施した。



第1図　遺跡位置図（1/25,000）

〔2〕発掘調査組織

調査主体　浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎）

事務局　社会教育係長：丸山　耕一

発掘担当者　上代　純一（國学院大學歴史考古学会部長）

調査員　國学院大學学生

調査協力員　橋場安国・峯村今佐夫・柳沢徳雄・佐藤利男・小泉政志・伊藤　理・竹重祐夫

〔3〕発掘調査の経過

平成5（1993）年

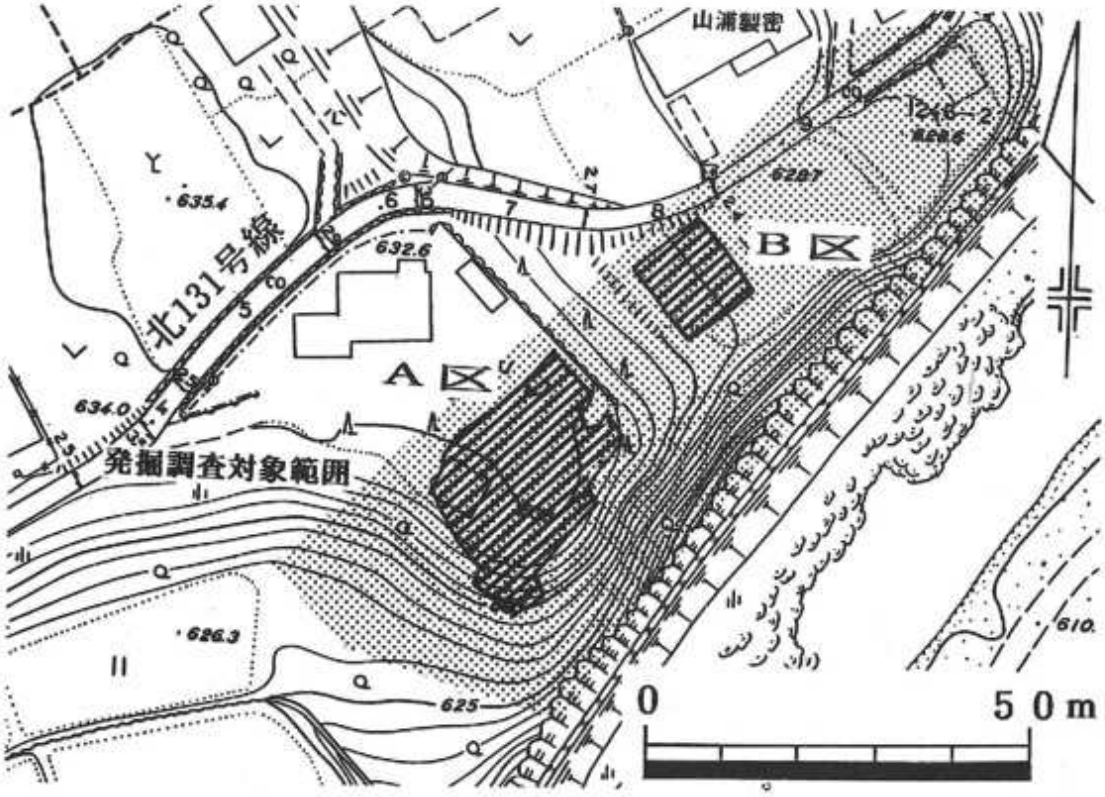
9月13日	発掘器材の搬入。調査区域の設定
9月14～18日	重機による表土掘削
9月19～25日	遺構確認作業
9月26～10月28日	遺構調査（A・B区同時進行）
10月30日	遺構調査終了。全体図を作成
10月31日	発掘器材を搬出し、現地での調査終了。

〔4〕調査区の概要

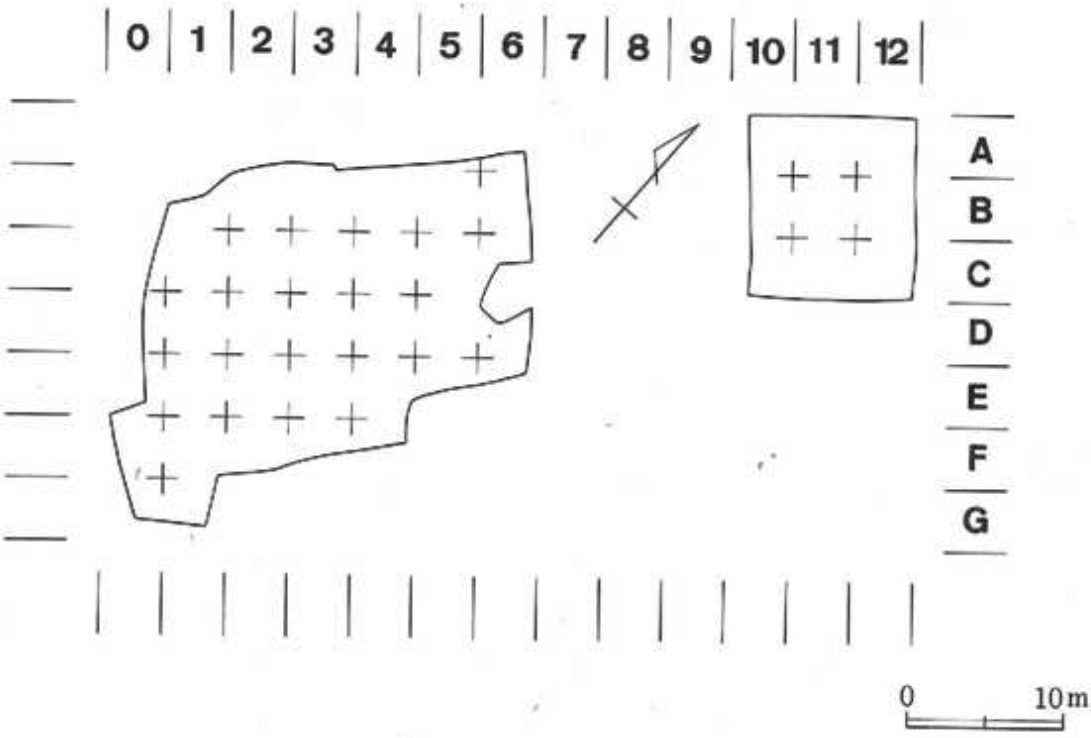
今回の発掘調査は、道路建設予定地の形状に合わせる形で発掘調査区を設定した。地形的には、2面の段丘面を北東から南東方向に横断する状況で、上位段丘面をA区、下位段丘面をB区とし、第Ⅲ章に詳述する。2面の段丘面は、比高差約6m前後で、下位段丘面のB区と千曲川との比高差は7mである。A区の西側にはさらに上位段丘面が広がり、北側に田中島遺跡、南側に中平遺跡が存在する。

A区の調査では、弥生時代後期の竪穴状遺構2基、土壙1基、中世の竪穴状遺構1基、時期不明の竪穴状遺構1基、時期不明の土壙2基、時期不明のピット9基が検出された。弥生時代後期と中世に利用された場所である事が判明したことは特筆されよう。平成6年度に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された田中島遺跡からは、弥生時代後期の方形周溝墓が検出されており、両遺跡の密接な関係が想定される。

B区の調査では、礫群が認められたが、調査の結果では上位段丘面（A区）の基底層である礫層が滑落して再堆積した状況が認められ、自然に形成されたものと判断された。しかし、縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器、中世の土器が出土し、本遺跡の時代的な幅を知る上で重要な資料が検出されている。



第2図　遺跡付近図（1/1,000）



第3図　グリッド配置図（1/500）

第II章　遺跡の立地と環境

北佐久郡浅科村は、長野県の中央部東寄りに位置し、北東から南東は小諸市・佐久市、西に望月町、北西には北御牧村にそれぞれ隣接する農村地域である。東に浅間山をのぞむ佐久盆地の中央に位置し、西は蓼科山に連なる裾野、北は御牧原台地が広がる。東側には、千曲川が北流し、河岸段丘が発達し、西高東低の地形を呈している。村の中央部では、粘性の強い土壌から成る平坦地が広がり、近世に五郎兵衛用水が開鑿されて以来の穀倉地帯となり、今日の水田風景に至っている。

中央部には中山道が東西に走り、現在は国道142号バイパスが、村に東寄りの八幡地区で中山道に接続している。また、北寄りでは北陸新幹線が通過している。

近年の上信越自動車道や北陸新幹線の建設に伴い、豊かな自然に恵まれた農村地域にも開発の波が及びつつある。

浅科村における遺跡は、村の中央部の平坦地域は近世以降に開発が行われた地域であり、原始・古代から中世に亘る遺跡の多くは、蓼科山に連なる尾根上や御牧原台地、千曲川や支流が形成する河岸段丘面に多く分布する状況が明らかにされている。

千曲川と布施川が合流する布施川右岸の段丘上に立地する土合遺跡では、以前より縄文時代中期の土器片が表採されていた。平成４年に北陸新幹線建設の関連工事に伴う発掘調査が、長野県埋蔵文化財センターによって実施され、縄文時代後期の竪穴住居跡が調査されている。また、土合遺跡の対岸（千曲川左岸）地域でも、縄文時代中期から後期にかけての土器片が表採されている。

今回発掘調査を実施した御馬寄古城跡の西側段丘面に位置する中平遺跡・田中島遺跡は、広い範囲から縄文時代中・後期の土器片が散布しており、大規模な縄文集落の存在が予想される。

弥生時代の遺跡は、村内に11か所確認されている。いずれも後期の箱清水式期で、塩名田原、田中島、上の平、上屋敷、入の沢、明神平、大門先、天神平、須釜原などである。平成６年度に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された田中島遺跡からは、方形周溝墓が３基検出されている。

古墳時代前期の遺跡では、御馬寄古城跡と千曲川を挟んだ対岸に位置する砂原遺跡から、古墳時代初頭の住居跡が１軒検出されている。また、布施川流域の蓬田地区にある寺田遺跡からは、東海地方に出自を持つ「Ｓ字状口縁台付甕」の破片も出土している。この時期の遺跡相については、調査遺跡数が少なく不明な点が多いが、前段階の弥生後期以来の遺跡相と大差はないものと考えられる。外来系土器である「Ｓ字状口縁台付甕」の出土は、新たな地域的交流が開始されたことを物語ると同時に、この遺跡が古東山道に面していることから、古墳時代前期には既に古東山道が人・物・情報の伝播経路としての役割を果たしたことが想定されよう。

古墳時代後期の砂原遺跡は、千曲川段丘下位面に形成された７世紀後半の集落跡である。発掘調査では、竪穴住居跡４軒と掘立建物跡が検出され、土師器の坏・甕などが出土している。この集落は、千曲川の氾濫で埋没したことが明らかにされているが、居を構えるには条件の悪い場所で集落遺跡が検出されることは、当時の環境が現在とは異なっていた、つまり千曲川の流路や水量の問題

が関係していた可能性も指摘されよう。

また、古墳時代後期には、終末期の群集墳が多く認められる。塚原台地では洞口古墳が、舟久保段丘では原口古墳がある。また、布施川流域に入ると、7世紀前半から積石塚的要素を持つともいわれる13基からなる古墳群が出現する。土合1号墳からは円頭柄頭・銀象嵌鍔、馬具金具、環玉類が、すぐ背面の久保畑古墳からも頭椎柄頭などの出土が報告されている。

この様に、古墳時代後期になると、古墳群の造営が急増し、その背景には渡来系氏族との関連も想定されることから、当地の本格的な開発が行われた画期として認識される時代であり、また、古墳群造営の基盤には、相応の集落遺跡の存在も予測される。

奈良・平安時代に入ると、御牧原台地、八重原台地において須恵器生産が本格化する。8世紀後半から窯跡の数が増えはじめる。この地で古代の窯業生産遺跡が形成される背景には、信濃国分寺造営との関わりも予想されよう。9世紀に入ると須恵器生産が本格化し、須恵器窯の操業が活発化する。ここで生産された須恵器は、佐久地方一帯の集落遺跡へと供給され、消費遺跡である集落内での土器組成に変化を生じ、煮沸容器としての土師器甕、供膳容器の須恵器坏、貯蔵容器の須恵器甕といった安定した土器構成を認めることができる。村内での代表的遺跡としては、寺田遺跡が挙げられる。また、砂原遺跡でのプラントオパール分析によって、陸田による稲作が行われていたことが明らかにされている。

御牧原の尾尻からは、平安時代初期鋳造といわれる鉄鐘が出土し、「望月牧」と推定される地域から出土したことは、歴史的環境を考察する上で重要である。また、御馬寄・駒寄地域一帯は、望月牧の御馬を集めた場所と考えられ、国司・牧監が出向いて検校し、良馬は翌年8月に貢進するまで一年間調教するきまりとなっていた。周辺には牧に関連する施設の存在が予想される地域である。

また、蓬田の八幡神社境内にある国指定重要文化財の高良社（こうらしゃ）は、高麗社の意と考えられ、渡来系氏族との関わりが想定される。

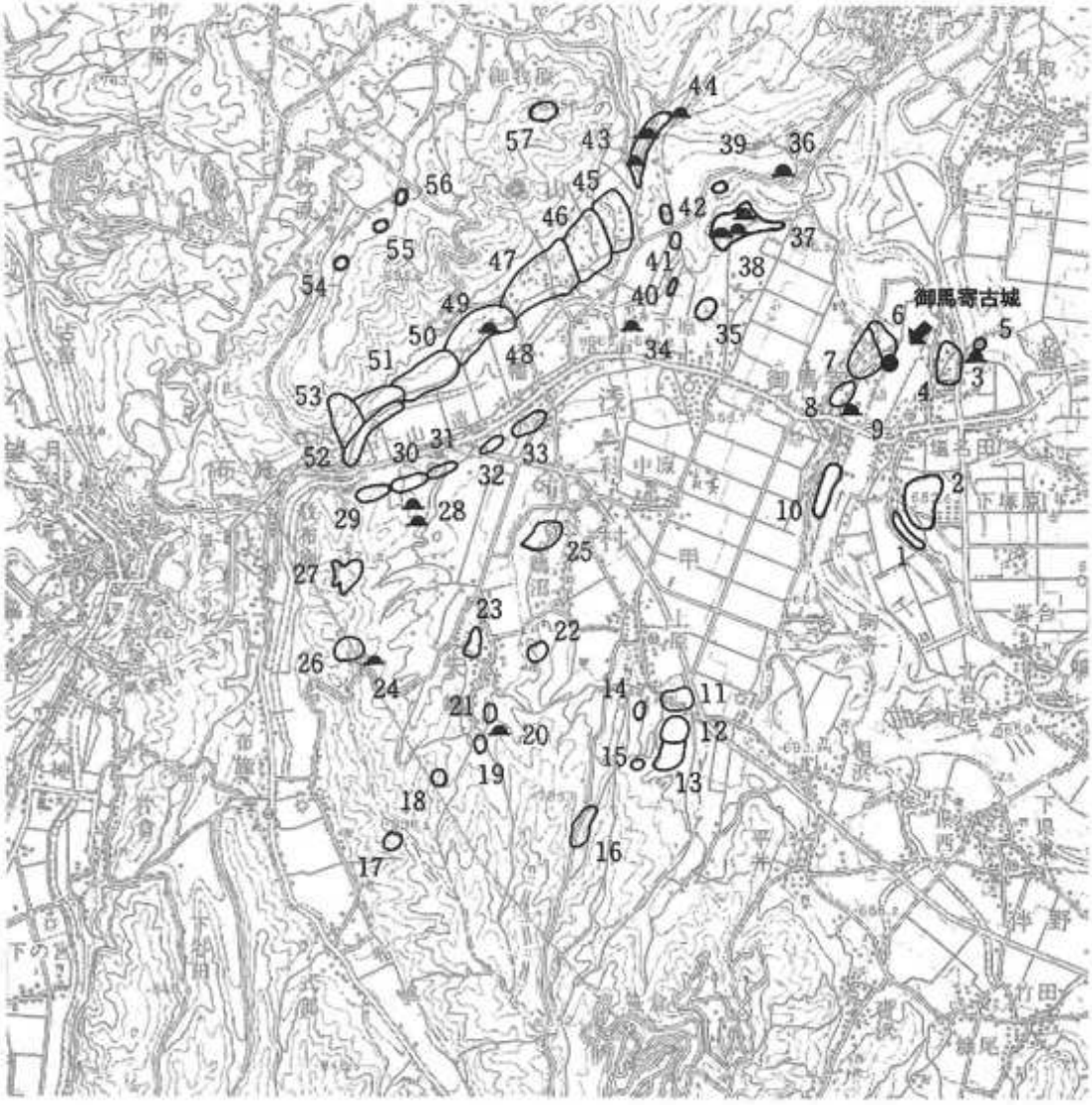
中世になると、当地域の豪族である矢島氏が、諏訪御符札古文書などに登場する。現在の矢嶋城と矢島氏が直接繋がるかどうかは不明である。

近世には中山道が整備され、千曲川には塩名田宿が設置された。御馬寄は商家が多く、1と6の日に市が立ち、塩名田宿と共に千曲川の往還橋の管理を行っていた。

寛永3（1626）年には、小諸藩主から市川五郎兵衛が用水開鑿の許可を得て、「五郎兵衛用水」が開鑿され、村の中央部が現在のような田園地帯へと変貌し、土地の生産性も飛躍的に高まった。

幕末には、岩村田領の矢島・小諸領の桑山・蓬田・八幡・塩名田・御馬寄・天領の市左衛門新田・五郎兵衛新田の八ケ村であったが、市左衛門新田と塩名田が合併して塩名田村に（明治9年）、矢島・桑山・蓬田・八幡が南御牧村に（明治22年）、塩名田村と御馬寄村が合併して中津村（明治22年）がそれぞれ誕生し、昭和30年1月15日、南御牧村・五郎兵衛新田・中津村の3ケ村が合併し、現在の浅科村が成立した。

浅科村の村名は、北の浅間山、南の蓼科山の両山を見渡せる格好の場所であることから浅間の「浅」と蓼科の「科」をとって命名され、東西5km、南北6.5km、総面積19.54km²、人口6,575人（平成8年8月現在）の、自然に恵まれた田園情緒あふれる村である。



第4図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

1	舟久保遺跡	13	打越窯址	25	権見山遺跡	37	土合遺跡	49	唐沢遺跡
2	塩名田遺跡	14	菖蒲沢窯址	26	細久保城跡	38	土合古墳群	50	中村遺跡
3	洞口遺跡	15	前林窯址	27	虚空蔵城跡	39	久保畑古墳跡	51	松ケ沢遺跡
4	砂原遺跡	16	中荻久保遺跡	28	兜山古墳	40	山の田遺跡	52	寺田遺跡
5	五領城遺跡	17	布施氏城跡	29	砂山遺跡	41	駒込遺跡	53	西の平遺跡
6	中平遺跡	18	上山の神塚	30	島久保遺跡	42	山梨遺跡	54	尾尻遺跡
7	田中島遺跡	19	雨の宮遺跡	31	吹上遺跡	43	入の沢古墳群	55	須窯原遺跡
8	上の平遺跡	20	宮脇古墳	32	神明遺跡	44	入の沢遺跡	56	柳沢窯址
9	上平の塚古墳	21	上屋敷遺跡	33	宿遺跡	45	明神平遺跡	57	富士見塚
10	神平遺跡	22	天徳城跡	34	経塚古墳	46	天神平遺跡		
11	西連寺遺跡	23	矢鳴城跡	35	植木辺窯址	47	水地村遺跡		
12	一本松遺跡	24	茨尾根古墳	36	火の雨塚古墳	48	蓬田唐沢古墳		

第1表　周辺遺跡地名表

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物

〔1〕A区の調査

上位の段丘面に位置するA区は、東方の千曲川へ突出しており、東側は急崖、南側は谷が湾入している。遺跡の北・西は、段丘面が広がり、オープン・スペースとなり、田中島・中平遺跡が広がる。調査区は、4m×4mの任意グリッドを設定し、東西方向を0～7、南北方向をA～Gとした（発掘調査時の東西方向のグリッド番号の起点が10から始まっていたが、整理作業の段階で、10→0に変更した）。

検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴状遺構2基、弥生時代の土壙1基、中世後期の竪穴状遺構1基、時期不明竪穴状遺構1基、時期不明土壙2基、時期不明ピット9基である。時期を特定できない遺構は、覆土の特徴などから、中世以降に属する可能性が高いと思われる。遺構は調査区の西寄りと調査区中央部に密に分布する傾向が認められる。

(1)　表土層出土の遺物

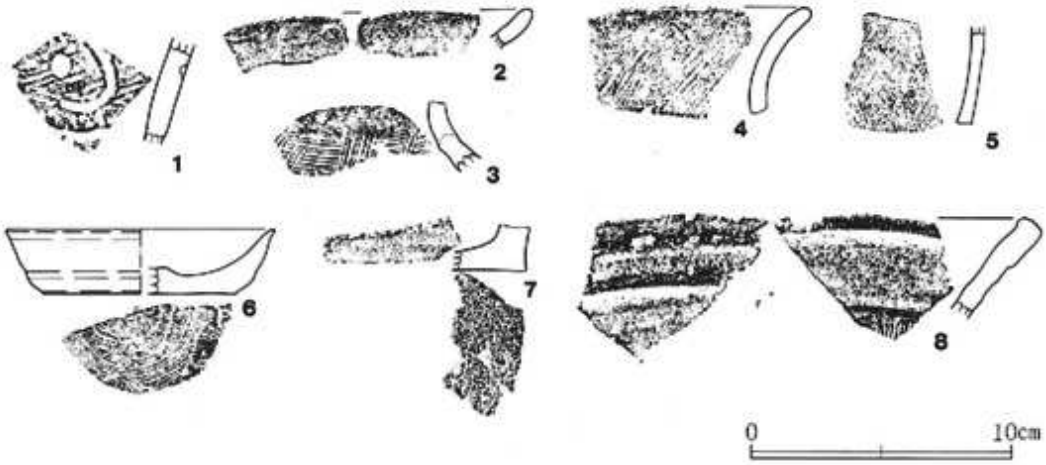
第6図1は深鉢形土器の胴部破片である。沈線で渦巻状の文様を描き、中央部に円形刺突を施す。沈線区画内にはLR縄文を充填する。暗茶褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。縄文時代後期前半の土器と思われる。

2～5は、弥生時代後期の箱清水式に比定される土器である。2は高杯の口縁部破片と思われる。口縁は外反し、わずかに肥厚する。器面は内外面とも横方向に研磨され、赤彩が施される。胎土に微砂粒をわずかに含み、暗黄褐色を呈する。3は壺形土器の頸部破片である。頸部には横方向にハケメを周圏させた後、縦方向にハケメを付加する。頸部から口縁に向かう部分は研磨され、赤彩が施される。胎土に微砂粒を含み、暗黄褐色を呈する。4は甕形土器の口縁部破片である。頸部から緩やかに外反し、口端はわずかに丸みを帯びる。外面は斜め方向にハケメが施され、内面は横方向にナデ調整される。暗灰褐色を呈し、微砂粒を含む。5は甕形土器の胴部破片である。外面にはハケメが横羽状に施され、内面はナデ調整される。暗灰褐色を呈し、微砂粒を含む。

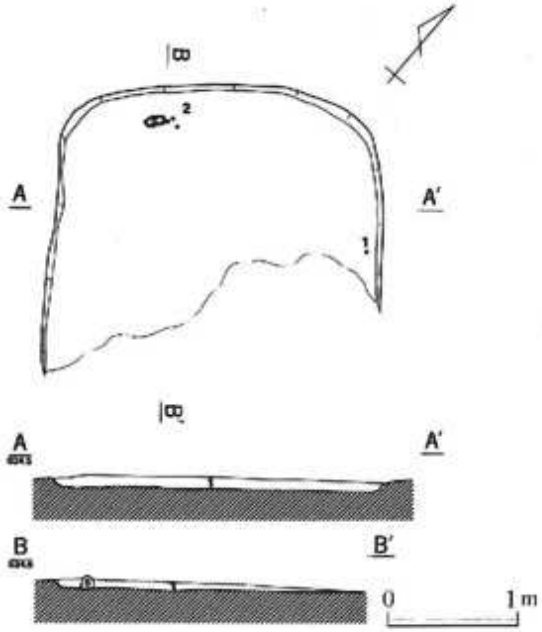
6は中世在地系土器で、酸化焔焼成による土師質の坏である。左回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕が認められる。外面は底部から直線的に立上がり、口端は小さく外反する。内面は丸みを帯びて立上がり、内底部中央は高まる。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多く含む。7は土鍋の底部破片である。底部外周には横方向のケズリ調整が施され、外底部は砂底である。暗茶褐色から黒褐色を呈し、微砂粒を多く含む。

8は近世に属する陶器である。口縁は外反し、外面は肥厚する。口端は内側に突出し、丸味を帯びる。内面には掻目が施される。内外面には光沢のある茶褐色釉が施され、素地は暗黄褐色を呈し、微砂粒、黒色粒子を含む。18世紀後半の美濃窯系陶器のすり鉢であろう。

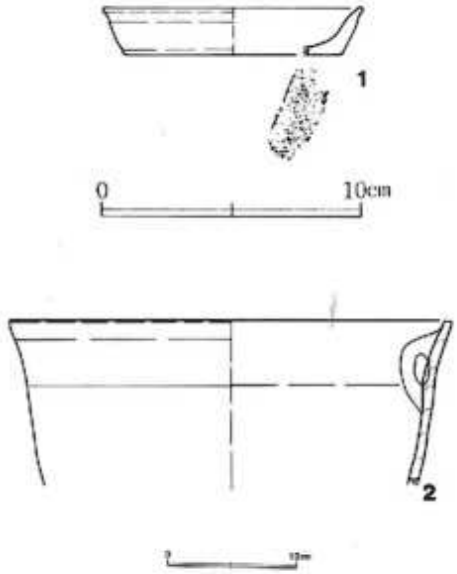
第５図　Ａ区全体図（1/250）



第６図　Ａ区表土層出土遺物（1/3）



第7図　第1号竪穴状遺構実測図（1/60）



第8図　第1号竪穴状遺構出土遺物（1/3）

(2)　竪穴状遺構

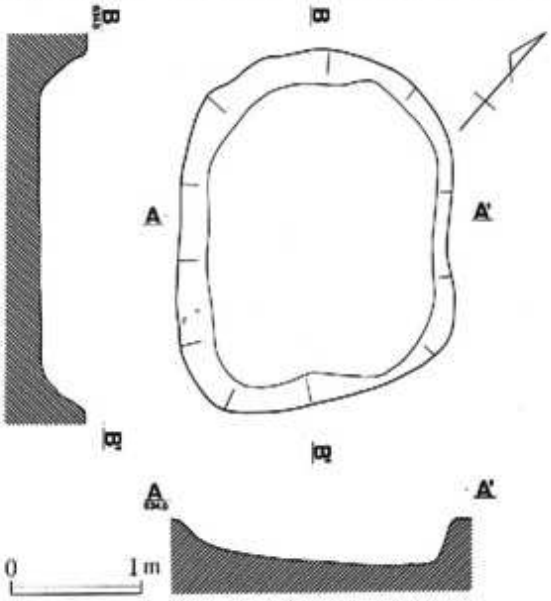
〈第1号竪穴状遺構〉

遺構（第7図）

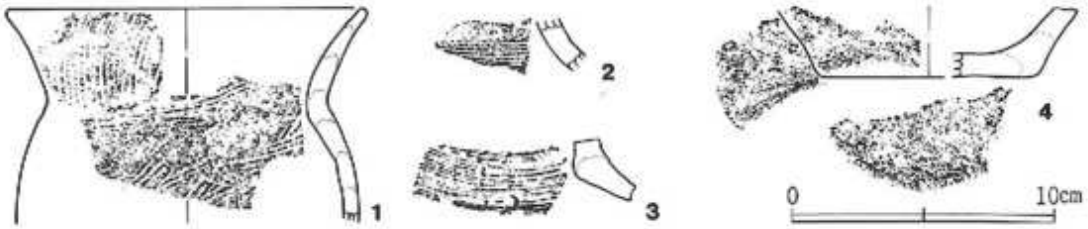
調査区の南側中央部付近、E・F－3グリッドで検出された。千曲川に面した南東の立上がりは、地形的な傾斜のため検出できなかった。隅丸長方形プランを呈し、長径は現存部分で217cm、短径256cm、深さ5cmを測り、長軸方向はN-38°-Wである。覆土は礫を含む黒褐色土で、床面には粘土が貼ってあった。床面を精査したが、炉跡や柱穴などの関連施設は認められなかった。床面から中世土器が出土しており、室町時代後半の時期と思われる。

遺物（第8図）

1は土師質土器の坏である。口径9.8cm、器高1.9cm、底径8.4cmを測り、残存率は約30%である。左回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕が認められる。底部から直線的に外反し、口縁は外方に突出する。暗褐色から暗黄褐色を呈し、微砂粒を多く含む。2は土師質の土鍋である。推定口径34cmを測る。輪積成形で、胴部は軟質木口状工具による縦方向のナデ調整、口縁は同様の工具による横方向のナデの後、ヨコナデが施される。口縁はわずかに外反するが、胴部との境は緩やかである。口端は角張って面を成す。一部に環状の把手



第9図　第2号竪穴状遺構実測図（1/60）



第10図　第２号竪穴状遺構出土遺物（1/3）

（内耳）が貼付される。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多く含む。外面には煤の付着が認められる。

〈第２号竪穴状遺構〉

遺構（第９図）

調査区の中央部付近、D・E－３・４グリッドで検出された。楕円形に近い隅丸方形プランを呈し、長径268cm、短径206cm、深さ36cmを測り、長軸方向はN-40°-Wである。覆土から弥生土器が出土しており、弥生時代後期に属すると思われる。

遺物（第10図）

１は小型の甕形土器である。口縁は外反し、肩部の張りは弱い。推定口径約13.6cmを測る。口縁は縦方向のハケメ、頸部には横ハケメ、胴部は斜め方向のハケメが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多く含む。器面は二次焼成を受け、劣化している。２は壺形土器の頸部破片である。頸部には横方向のハケメが巡り、無文部分には赤彩が施される。暗黄褐色を呈し、微砂粒を多く含む。３は壺形土器の頸部破片で、横方向のハケメが施されるが、一部に止めが見られ、籠状文風となる。暗黄褐色を呈し、微砂粒を多く含む。４は壺形土器の底部破片であろう。底径約8.2cmを測る。暗褐色を呈し、微砂粒を多く含む。以上の土器は、弥生時代後期の箱清水式に比定される。

〈第３号竪穴状遺構〉

遺構（第11図）

調査区の部付近、C・D－２・３グリッドで検出された。楕円形に近いプランを呈し、長径276cm、短径190cm、深さ41cmを測り、長軸方向はN-58°-Eである。覆土から縄文土器・弥生土器の破片が出土している。遺構の時期を特定できる遺物は認められないが、弥生時代後期の可能性が高い。

〈土層説明〉

第１層　黒褐色土（しまり弱い。）

第２層　褐色土（ローム粒子を全体に含む。）

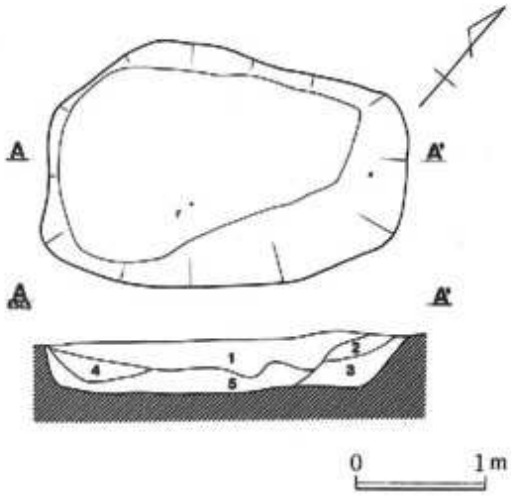
第３層　暗黄褐色土（砂質のローム層。）

第４層　黒褐色土（ローム粒子含む。）

第５層　暗褐色土（砂質土）

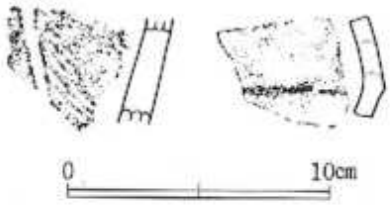
遺物（第12図）

１は深鉢形土器の胴部破片である。地文にＬＲ縄文を施し、縦方向の沈線で縦位区画する。暗黄灰色を呈し、微砂粒を多量に含む。縄文時代中期



第11図　第３号竪穴状遺構実測図（1/60）

後半の土器と思われる。2は壺形土器の腰部破片である。腰部が屈曲して底部に至る部分で、器面は内外面ともに研磨される。暗黄褐色を呈し、微砂粒を含む。弥生時代後期の箱清水式に比定されよう。

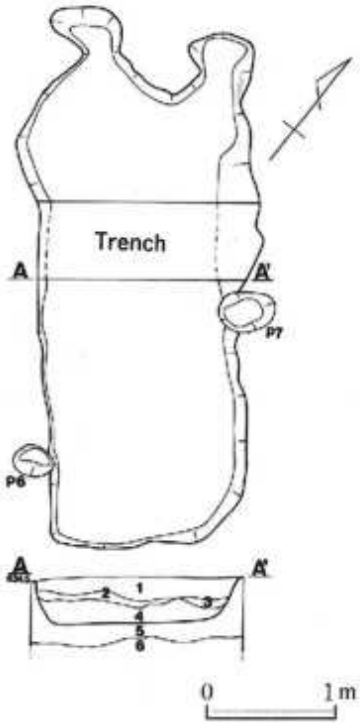


第12図　第3号竪穴状遺構出土遺物（1/3）

〈第4号竪穴状遺構〉

遺構（第13図）

調査区の部付近、B・C－2・3グリッドで検出された。長方形プランを呈し、長径350cm、短径170cm、深さ34cmを測り、長軸方向はN-40°-Wである。北西短辺の両隅が突出しているが、カク乱と思われ、本来は長方形を呈していたと推定される。立上がりの壁は急傾斜で、長方形の土壙とした方が適切かもしれない。覆土から弥生土器が出土しており、弥生時代後期に属すると思われる。



第13図　第4号竪穴状遺構実測図（1/60）

〈土層説明〉

第1層　褐色土（焼土粒子・炭化物・礫を含む。）

第2層　褐色土（砂礫主体。）

第3層　褐色土（焼土粒子・炭化物・礫を含む。砂質。）

第4層　褐色土（砂質。）

第5層　砂礫層（地山層。）

第6層　砂礫層（地山層。第5層よりも黄色味を帯びる。）

遺物（第14図）

1は甕形土器の口縁部破片である。口縁は直線的に外反し、口端は先細る。外面には縦方向のハケメが施される。暗褐色を呈し、微砂粒を多く含む。2は壺形土器の口縁部破片である。口縁は外反し、口端はわずかに外方へ突出する。器面は内外面ともに研磨される。暗黄褐色を呈し、微砂粒を多く含む。3は高杯の脚部と思われる。脚裾は直線的に開き、脚端部は外反する。内外面ともに斜めのハケメが施された後、脚端部は円周方向のハケメが施される。暗褐色を呈し、微砂粒を多く含む。以上の土器は弥生時代後期の箱清水式に比定されよう。

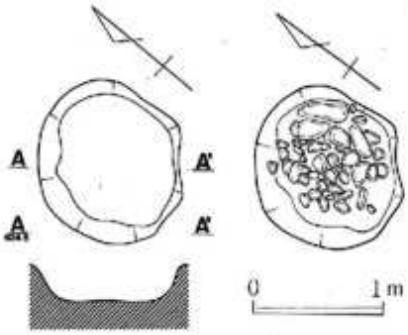
第14図　第4号竪穴状遺構出土遺物（1/3）

(3) 土　壙

〈第１号土壙〉

遺構（第15図）

調査区の南西部部付近、Ｂ－１・２グリッドで検出された。不整円形プランを呈し、長径125cm、短径118cm、深さ27cmを測り、長軸方向はN-42°-Eである。覆土中に人頭大から拳大の円礫が多量に埋没しており、集石土壙と判断される。出土遺物は見られなかった。

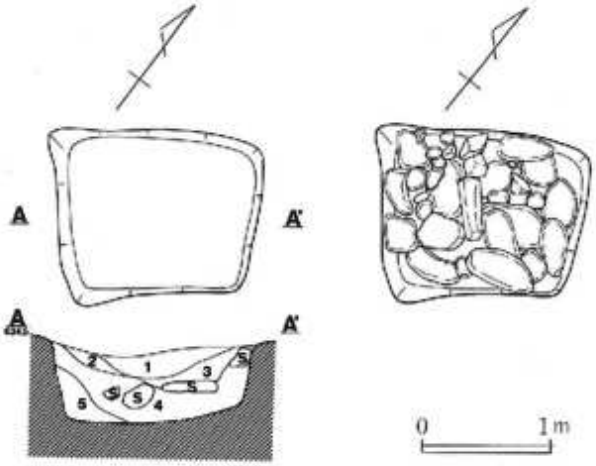


第15図　第１号土壙実測図（1/60）

〈第２号土壙〉

遺構（第16図）

調査区西寄りの中央部付近、Ａ・Ｂ－３グリッドで検出された。方形プランを呈し、長径158cm、短径132cm、深さ54cmを測り、長軸方向はN-55°-Eである。覆土中に人頭大の円礫が多量に埋没しており、集石土壙と判断される。出土遺物は、覆土から弥生時代後期の土器片がわずかに出土した。



第16図　第２号土壙実測図（1/60）

〈土層説明〉

第１層　褐色土（ローム粒子、礫を含む。）

第２層　褐色土（ローム粒子、焼土粒子、礫を含む。）

第３層　黒色土（礫の混入少ない。）

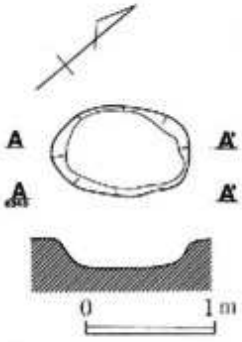
第４層　暗褐色土（砂質土。ローム粒子、礫を含む。）

第５層　褐色土（砂質土。）

〈第３号土壙〉

遺構（第17図）

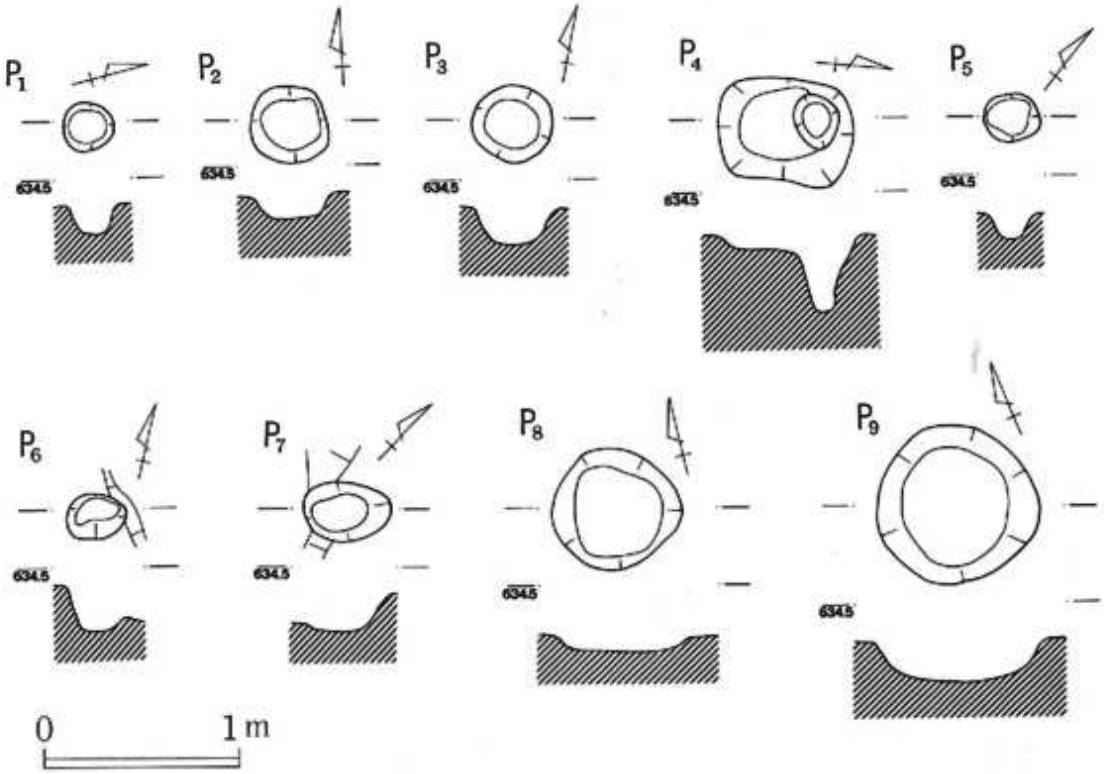
調査区の南側中央部付近のＥ・Ｆ－３グリッド内、第１号竪穴状遺構の南東に近接して検出された。楕円形プランを呈し、長径105cm、短径70cm、深さ21cmを測り、長軸方向はN-36°-Eである。出土遺物は見られなかった。



第17図　第３号土壙実測図（1/60）

(4) ピット（第18図）

ピットは９基検出された。調査区の中央部西側に偏在する分布を示すが、その配列には規則性は見られず、掘立建物跡として認識できるものは無い。遺物も伴なわず、その時期は特定できないが、覆土の所見等から、中世以降に属する可能性が高いと思われる。



第18図　ピット1～9実測図（1/40）

ピット番号	調査区	形態	規模（長径×短径×深さ）cm	長軸方向	備考
ピット　1	B－5	円形	25×25×14	N－9°－E	
ピット　2	B－4	隅丸方形	40×38×12	N－4°－W	
ピット　3	B－4	円形	40×40×18	N－68°－W	
ピット　4	B－3	長方形	68×54×8・25×23×28	N－9°－W	北側が深まる
ピット　5	B－2	円形	27×24×13	N－45°－E	
ピット　6	B・C－2	楕円形	30×24×22	N－74°－E	第4号竪穴状遺構より新しい
ピット　7	B－3	楕円形	45×31×21	N－48°－E	〃
ピット　8	B－2	不整円形	64×56×8	N－60°－W	
ピット　9	B－2	円形	82×78×20	N－24°－W	

第2表　ピット観察表

〔2〕B区の調査

(1) 概　要

B区は、A区の北東に位置し、A区よりも下位の河岸段丘面である。A区との比高差はマイナス6m、東に北流する千曲川河床との比高差はプラス7mである。現況では畑地となっていた。発掘調査実施時点では、作物などの関係から、制約された調査区を設定せざるを得なかった。従って、方形に近い調査区とし、A区の調査区から連続させて4m×4mの任意グリッドを設定し、東西方向、南北方向とした（発掘調査時のグリッド番号は、A区の東西方向が10から始まっており、整理段階で10→0に変更したため、B区の番号も変更している）。

調査区域内の基本層序は、第Ⅰ層の表土層が全面を覆い、現状では耕作土となっている。第Ⅱ層以下が、プライマリーな堆積層と判断された。第Ⅱ・Ⅲ層は、黒色土層中に人頭大から拳大の円礫が混在しており、下の第Ⅳ層とは不整合に接していた。発掘調査では、第Ⅱ層中の礫群が人為的な石組の可能性を想定し、礫群の状況を把握した後に、第Ⅳ層上面で遺構確認作業を実施し、第20図に土層を示した調査区北・南壁面（A－A′・B－B′）は、サブトレンチによって第Ⅳ層を掘り抜いて、基底層を確認したものであり、第Ⅳ層以下が、この段丘面を構成する地山層と判断された。

〈第20図土層説明〉

第Ⅰ層　暗褐色土（表土層。小石・礫を含む耕作土。しまり弱い。）

第Ⅱ層　黒色土（拳大から人頭大の円礫を多量に含む。）

第Ⅲ層　黒褐色土（暗黄褐色の粒子を含む。）

第Ⅳ層　黄灰褐色土（砂質で酸化鉄を多く含む。しまり良い。B区の地山層。）

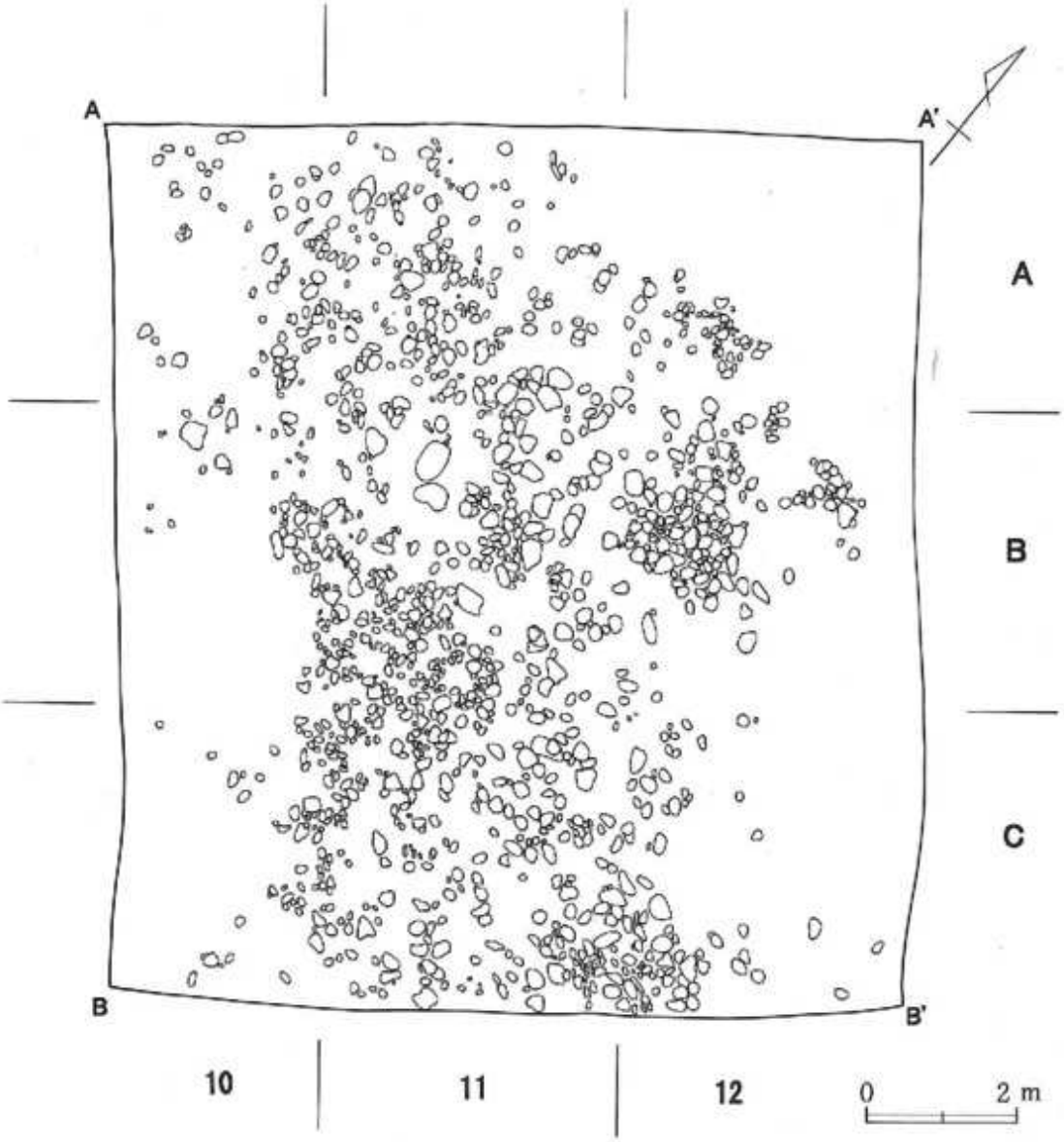
第Ⅴ層　灰褐色土（砂礫層。全体に酸化鉄を含む。）

(2) 礫　群

重機による表土掘削では、現在の耕作土までを除去したが、その段階でプライマリーな堆積土である第Ⅱ層が露呈し、人頭大から拳大の円礫が多数確認された。礫を使用した人為的な遺構である可能性を想定して、人力で礫を検出し、記録を作成した後に礫を除去したが、①礫は上位段丘面から流入して堆積する傾向が、土層観察から認められた点、②礫の堆積は重層的で、面的な分布を示していない点、③平面分布には規則性が認められない等の所見を得るに至り、上位段丘面の基底層を構成する礫層が滑落し、自然に堆積したものと結論された。礫に混じって、縄文時代から中世に至る土器・石器が出土した。

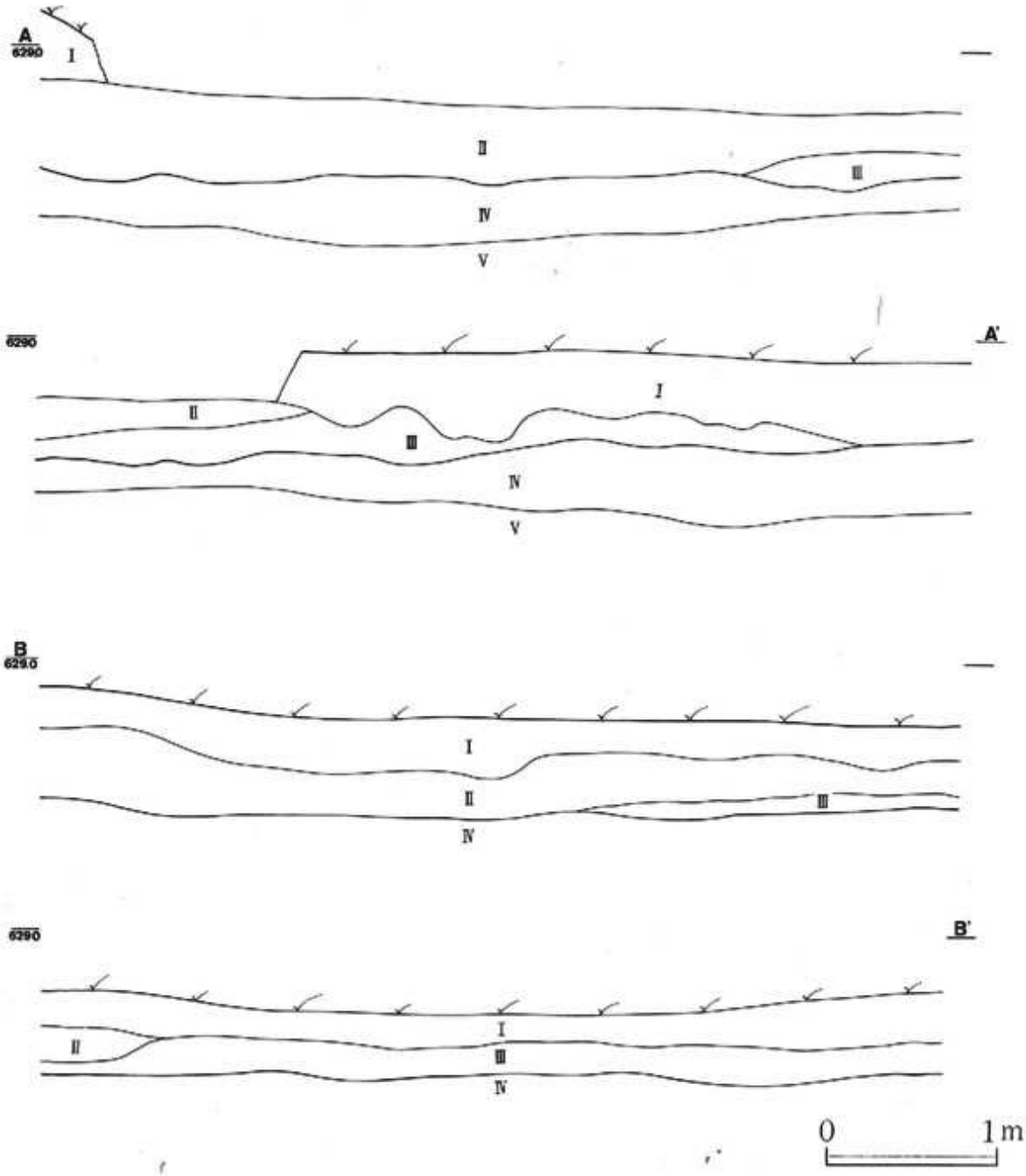
(3) 出土遺物

第21図1は深鉢形土器の胴部破片である。地文には原体LR、RL縄文による羽状縄文が施される。胎土に微砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。C－10グリッド出土。2はLR縄文が横位施文され、一部に自縄自縛の結節が認められる。胎土に微砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈する。C－10グリッド出土。3は半截竹管による平行沈線で文様を描き、一部に刺突のある貼付文が施される。暗褐色を呈し、微砂粒、小石を多く含む。C－11グリッド出土。以上の土器は、縄文時代前期に属すると思われる。4は深鉢形土器の胴部破片である。地文に斜め方向の沈線を充填し、縦方向の太

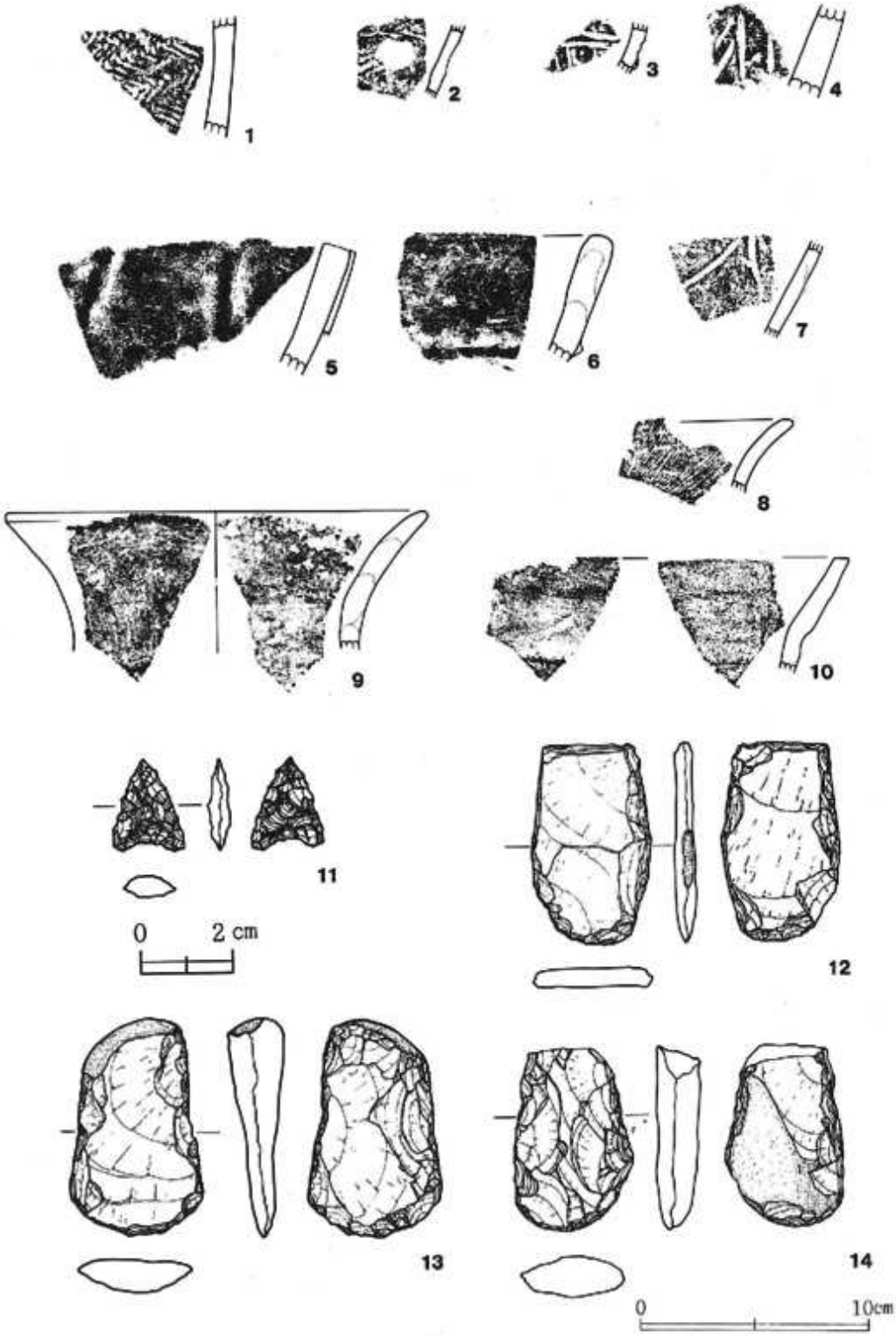


第19図　B区全体図（1/100）

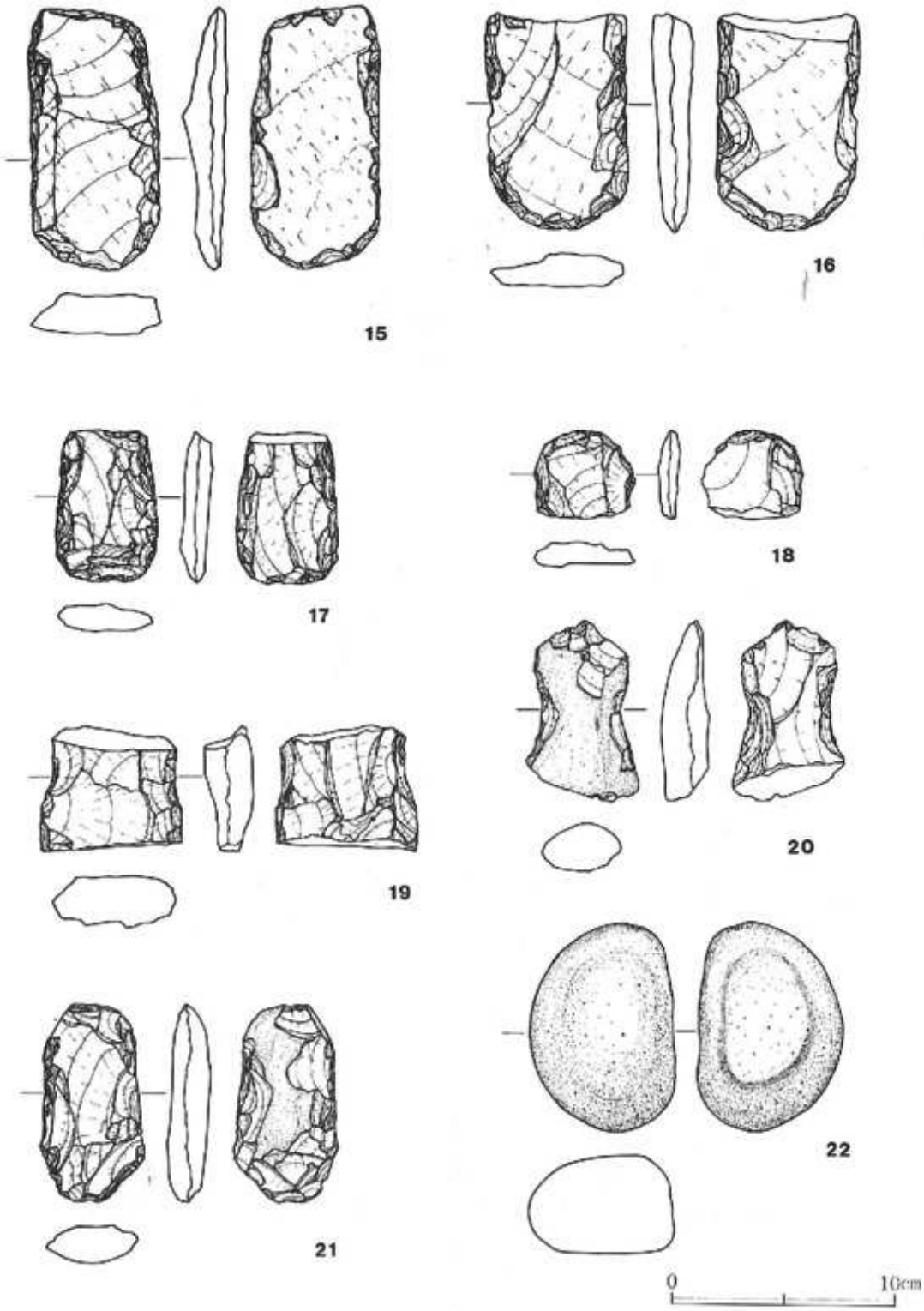
い2本沈線で縦位区画する。暗黄褐色から暗茶褐色を呈し、微砂粒、小石を含む。C－10グリッド出土。5は深鉢形土器の胴部破片で、隆線による文様が描かれる。地文には縄文が施されていたと思われるが、器面の磨耗が著しく、判然としない。暗黄褐色を呈し、微砂粒を多く含む。B－11グリッド出土。5は深鉢形土器の口縁部破片である。口縁は外反し、口縁部分は無文帯を成す。頸部には隆線が巡り、肩部が張る形態と思われる。暗褐色を呈し、微砂粒を多く含む。B－11グリッド出土。以上の土器は縄文時代中期後半に属すると思われる。7は深鉢形土器の胴部破片で、沈線で文様を描く。無文部分には研磨調整が施される。暗褐色を呈し、微砂粒を多く含む。縄文時代後期前半に属すると思われる。C－12グリッド出土。8は甕形土器の口縁部破片である。頸部から緩やかに外反し、口端は丸味を帯びる。外面は斜め方向のハケメが施され、内面は横方向にナデが施さ



第20図　B区土層断面図（1/40）



第21図　B区出土遺物(1) (1/3)



第22図　B区出土遺物(2)（1/3）

れる。暗黄褐色を呈し、微砂粒を含む。C－11グリッド出土。9は壺形土器の口縁部破片である。推定口径18.2cmを測る。頸部は直立気味で、口縁は緩やかに外反する。輪積成形で、内面には粘土接合部分の段差を残す。外面は、横方向のハケメの後、縦方向に研磨される。内面は横方向に研磨される。外面には赤彩が施される。暗黄褐色を呈し、砂粒をわずかに含む。B－12グリッド出土。以上の土器は、弥生時代後期の箱清水式に比定されよう。10は、中世後期に属する遺物である。在地系土器の土鍋の口縁部破片である。頸部は屈曲し、口縁は外反する。口端は角張って面を成す。頸部は指ナデにより段を有する。口縁部分はヨコナデ調整され、胴部に至る内面は、軟質木口状工具によるナデ調整が施される。暗褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。C－11グリッド出土。

11から22は、縄文時代に属する石器である。11は、B－10グリッドから出土した黒曜石製の石鏃の完形品である。基部には抉りが施される。長さ2cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ0.8gを測る。12はB－11グリッド出土の砂岩製の打製石斧である。長さ8.8cm、幅5.3cm、厚さ0.9cm、重さ62gを測る。13はB－11グリッド出土の砂岩製の打製石斧である。長さ9.6cm、幅6.8cm、厚さ2.5cm、重さ118gを測る。一部に礫面を残す。14はB－10グリッド出土の粘板岩製の打製石斧である。長さ8.1cm、幅5.2cm、厚さ2.1cm、重さ90gを測る。一部に礫面を残す。15はC－10グリッド出土の砂岩製の打製石斧である。長さ11.8cm、幅5.8cm、厚さ1.9cm、重さ132gを測る。背面は摂理面で割れている。16はC－10グリッド出土の砂岩製の打製石斧である。長さ9.8cm、幅6.4cm、厚さ1.5cm、重さ130gを測る。17はC－11グリッド出土の粘板岩製の打製石斧である。長さ6.8cm、幅4.6cm、厚さ1.5cm、重さ52gを測る。基部は欠損している。18はC－11グリッド出土の粘板岩製の打製石斧で、基部の破片である。現存値で長さ3.9cm、幅4.5cm、厚さ1.1cm、重さ21gを測る。基部は欠損している。19はB－12グリッド出土の安山岩製の打製石斧である。基部および刃部を欠損する。現存値で長さ5.6cm、幅6.4cm、厚さ2.3cm、重さ90gを測る。20はC－10グリッド出土の粘板岩製の打製石斧で、刃部を欠損する。一部に礫面を残す。現存値で長さ8.1cm、幅5.1cm、厚さ2.1cm、重さ92gを測る。21はC－10グリッド出土の粘板岩製の打製石斧で、一部に礫面を残す。現存値で長さ8.9cm、幅4.7cm、厚さ1.8cm、重さ89gを測る。22はB－12グリッド出土の磨石である。安山岩の円礫を用いた石器で、片面は磨耗して平坦面を成す。長さ9.7cm、幅6.6cm、厚さ4.4cm、重さ430gを測る。一部に赤色顔料の付着が認められる。

第Ⅳ章　総　　括

(1)　縄文時代

千曲川河岸段丘の２面にわたる調査で、下位段丘面の調査区であるＢ区からは、縄文時代前期から後期にかけての土器片、石器（打製石斧10点、黒曜石製石鏃１点、磨石１点）が出土した。土器に比べて石器の出土量が際立っている。住居跡等の生活遺構は検出されなかったが、打製石斧が比較的集中して出土したことは注目される。打製石斧は、土堀具として使用されたといわれる石器であり、これらが集中的に見られたことは、或る特定の行動が行われたことを示している。石斧には完形品の他、基部を欠損する例も多数認められた。この地で石器を消耗するような行動が行われたことは確実であろう。石器製作の場とも考えられるが、製作時に生じる剥片は認められなかった。有用植物の採取が行われたのか、石器の廃棄の場所であったのか、その具体的な内容については現在のところ不明である。

縄文時代における集落以外の生活領域であり、集落を取り巻く経済諸活動が行われた後背地であることは確かである。

(2)　弥生時代

上位段丘面のＡ区では、竪穴状遺構が３基検出されている。残存状態が悪く、詳細は不明であるが、弥生時代後期の箱清水式期に属すると考えられる。出土した土器の器種には、高杯・壺・甕が見られ、壺には箱清水式に特徴的な赤彩を施したものが多く認められた。この時期に属する遺構も検出されている。本遺跡の西側段丘上にある田中島遺跡では、平成６年度の発掘調査によって、方形周溝墓が検出されている。こうした墓域の存在は、付近に集落遺跡の存在を暗示するものであり、今回の調査区が弥生時代後期における集落域に含まれる場所であった可能性が強いと思われる。

(3)　中　世

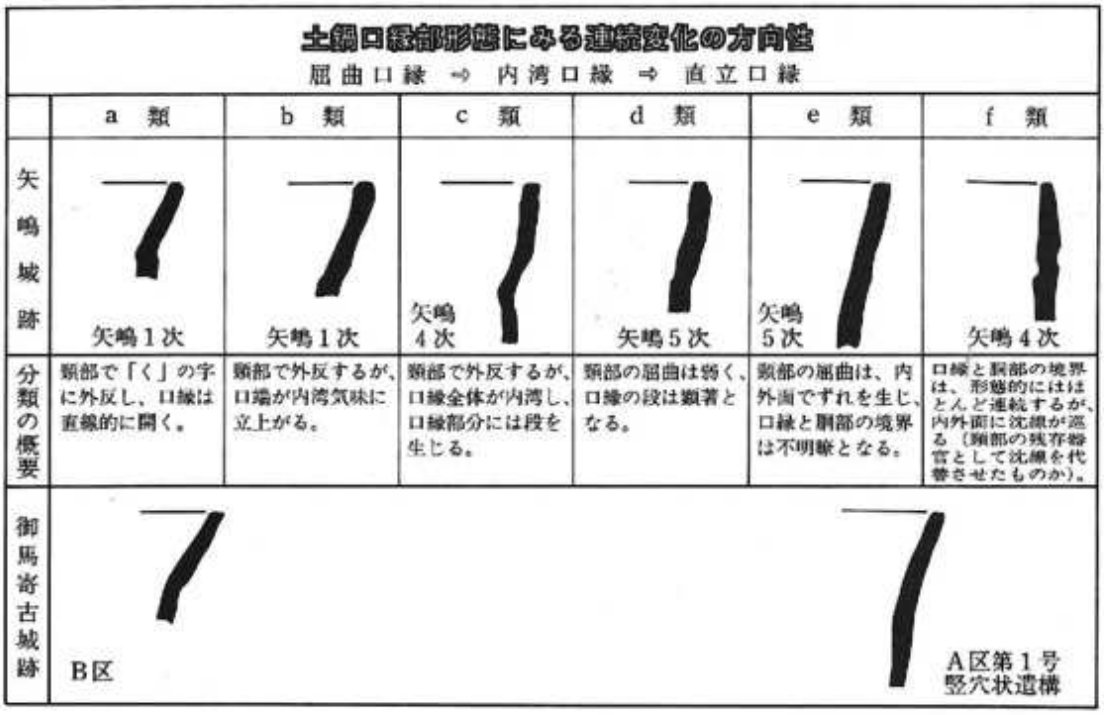
Ａ・Ｂ両調査区から出土した中世在地系土器は、中世期における本遺跡での生活跡を物語る資料である。とくにＡ区で検出された竪穴状遺構は、床面から土鍋・土師質土器皿が出土し、両者のセット関係を示す資料と言えよう。

中世在地系土器研究は、近年の中世城館跡の発掘調査が急増する中で、かなりまとまった資料が揃い始めてきている。この地域で良好な資料として、佐久市「大井城」（註１）・浅科村「矢嶋城」（註２）が挙げられ、出土した夥しい土器群が、今後の研究の基礎資料となるであろう。

特に15～16世紀代にかけて盛行する土師質土鍋は、その口縁部形態や全体のプロポーション、器高・口径・底径の比率に顕著な変化が認められ、研究の深化によっては、ある程度の年代的な目安になると考えられる。

中世の土鍋は、体部内面に環状把手を貼付する特徴から「内耳土器」とも呼称され、中世土鍋と近世焙烙の概念が未分化な状態で認識されていたが、1979年に中村倉司氏によって考古学研究の俎上に乗せられて以来（註３）、中世遺跡の発掘調査の増加とも相俟って、報告事例が急増している。

長野県内の中世土鍋については、御社宮司遺跡の報告の中で、小林秀夫氏が伴出陶磁器などを手



第23図　中世土鍋の口縁部形態分類図

掛かりに編年観を提示している（註4）。

浅科村内でも、矢嶋城の6次に亘る発掘調査で中世土鍋が多数出土している他、1993年に発掘調査が実施された寺田遺跡（註5）でも報告されている。

ここでは、土鍋の口縁部形態に着目し、多くの中世土鍋が出土した矢嶋城の遺物をもとに口縁部形態の分類を提示し、御馬寄城出土土鍋との対比を行っておく。

口縁部が「く」の字に屈曲するタイプから、口縁の屈曲が弱まり、直線的な口縁へ変化し、最終的には口縁と体部との境が不明瞭化していくという、形態上の変化の変遷が辿れる。また、体部の直線化が進む段階で器種分化を生じ、器高が高く容量の大きいものと、器高の低いものに分かれ、後者が近世の焙烙の祖形となっていくのである。こうした形態変化の方向性が、ある程度明らかになりつつあるが、在地系土器は、地域毎に変化の様相が異なるため、北佐久地域を中心とした今後の研究に期待せざるを得ない。

A区第1号竪穴状遺構から出土した第8図2の土鍋と、B区出土の第21図10とでは、前者は口縁部の屈曲が弱く、先に述べた形態変化の方向性が時間差を反映するならば、第21図10の方が古い様相を呈し、第8図2の方がより新しい時期と想定され、両者に時間的な間隙がある可能性を明記しておきたい。

具体的な変遷観や年代論については、型式学的検討や文献史学との連携、年代を示す一括遺物の分析・検討、同一時間内における型式学的傾斜の問題、他地域の土器編年との交差年代など、様々な検討を行った上で考察すべきだが、矢嶋城の存続年代が、城郭の構造や陶磁器類から見て、概ね15世紀から16世紀中葉の年代幅の中であり、御馬寄古城から出土した土鍋も、この時間幅の中で理

解されよう。

今回の発掘調査地点は、御馬寄古城跡との伝承があり、発掘当初から城郭に関連する遺構の検出が期待された。『長野県の中世城館跡』（註６）では、単郭の中世城郭として今回の調査地点を想定している。発掘調査結果では、堀・土塁など中世城郭に関連する遺構は確認されず、今回の調査地点に御馬寄古城は存在しなかったと結論される。

しかしながら、今回の発掘調査結果をもって、御馬寄古城の存在そのものを否定するのではない。その理由として、この地域の歴史的な環境を考えるならば、古代以来の望月牧関連地域として、地名にその歴史性を残すと共に、中世後期には、千曲川対岸にある耳取城との関係や、千曲川流域に分布する中世城館跡の存在、小字名に残る「古城」「城の腰」「城山」「城ノ上」などの地名、調査で検出された竪穴状遺構や中世在地系土器、さらに『北佐久郡誌』（註７）には土塁・堀の残存していたことが記載されている。また、今回の調査地点よりも西側に位置する畑からは五輪塔の出土も報じられている（註８）。

この様な周囲の歴史的状況から見るなら、今回の発掘調査区周辺に御馬寄古城の存在が俄かに照射され、浮かび上がって来るのである。

註１　『大井城（黒岩城）』　佐久市教育委員会　1986年

註２　『矢嶋城跡―主郭部の試掘調査―』　浅科村文化財調査報告第５集　浅科村教育委員会　1991年

註３　中村倉司「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古』創刊号　土曜考古学研究会　1979年

註４　小林秀夫「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市その５―』1977年

註５　『寺田遺跡―古東山道・中仙道沿いの村―』　浅科村文化財調査報告第10集　浅科村教育委員会　1995年

註６　『長野県の中世城館跡分布調査報告書』　長野県教育委員会　1983年

註７　『北佐久郡誌』　長野県北佐久郡役所　1914年

註８　『浅科村の文化財　新版』　浅科村教育委員会　1994年

＜遺跡発掘調査の成果＞

砂原遺跡

平成４年　北佐久農業共済組合庁舎建築用地

古墳時代の竪穴住居跡　５軒

平安時代の竪穴住居跡　１軒

平成６年　新幹線建設事業用地

古墳時代の竪穴住居跡　30軒

中平・田中島遺跡

平成６年　新幹線建設事業用地

平安時代の竪穴住居跡　10軒

古墳時代初期の周溝墓　３基

蓬田・寺田遺跡

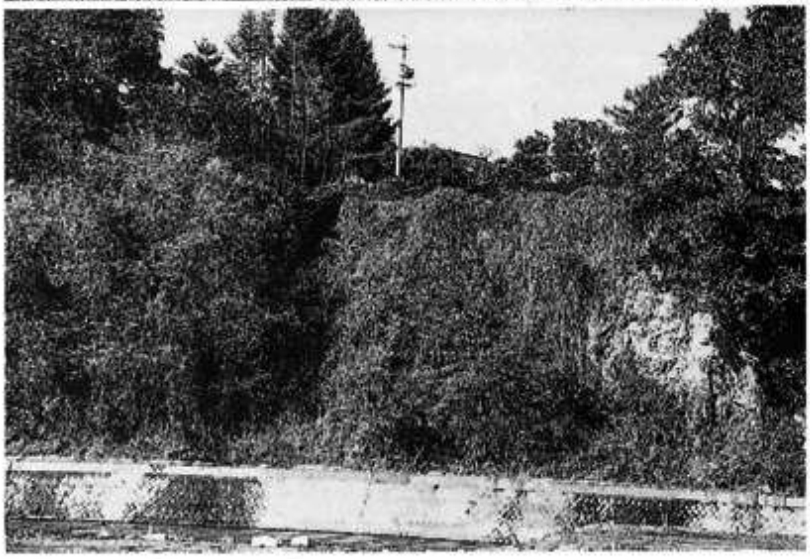
平成５年

平安時代の竪穴住居跡　３軒

図　版

遺跡遠景（東方、千曲川対岸より御馬寄城をのぞむ）

遺跡遠景（対岸の砂原遺跡付近から御馬寄城をのぞむ）



遺跡近景（千曲川から、段丘崖上が調査区のB区）

図版 2

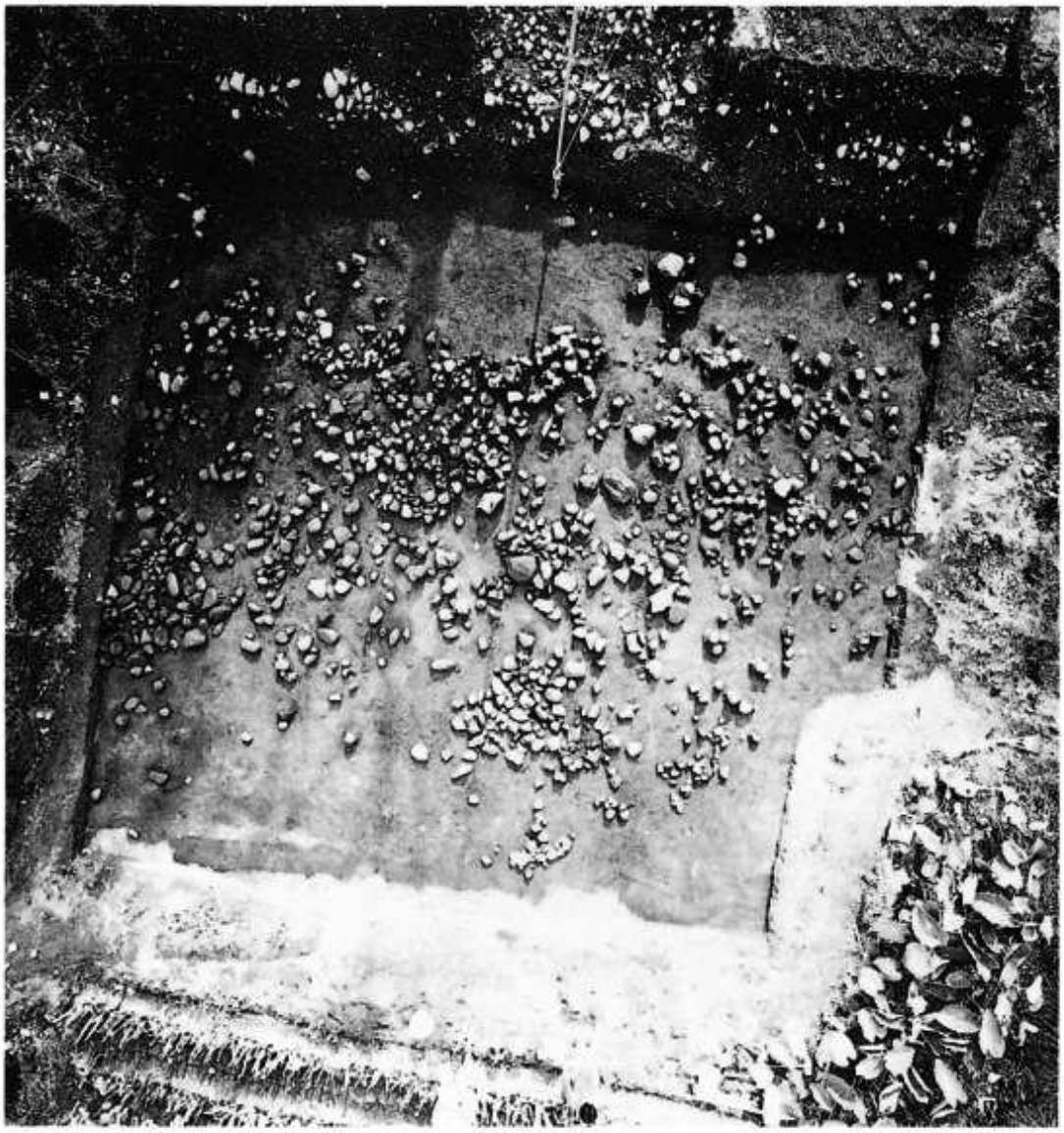
A 区全景（北から）

A 区全景（北から）

第 2 号土壙

第 4 号竪穴状遺構

図版 4



B 区全景（礫群の空中写真、上が北）

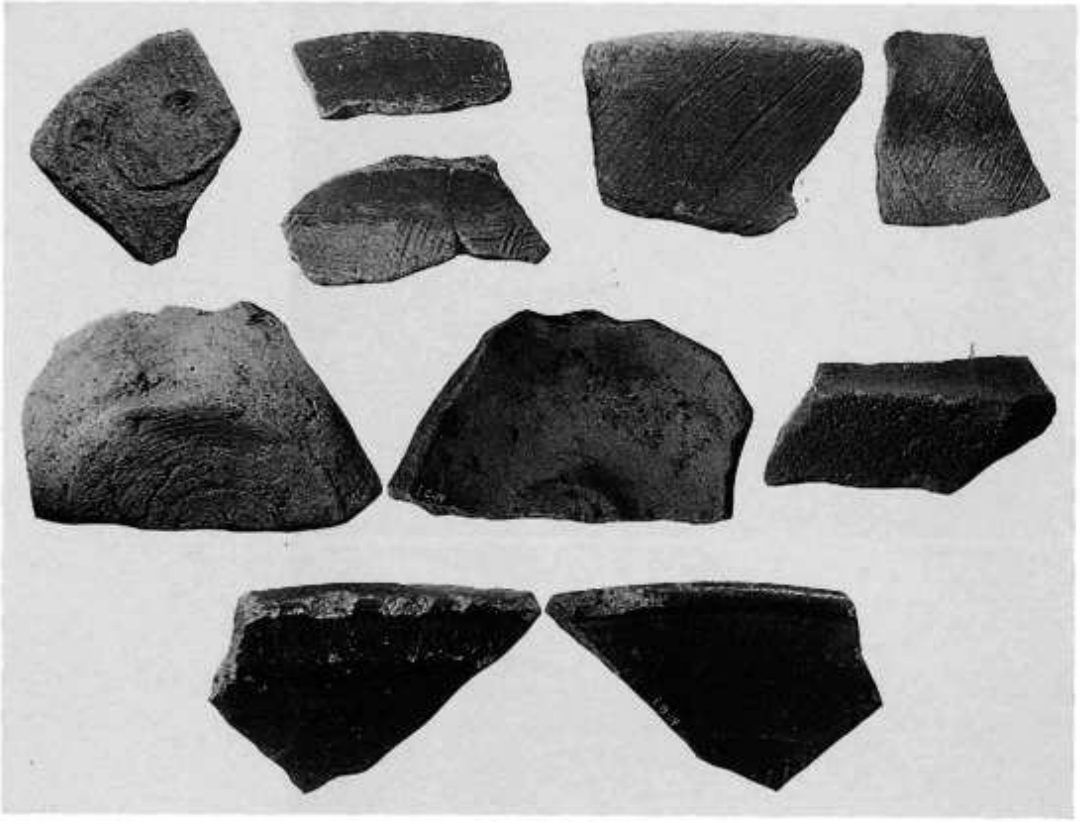
図版 5

B区全景（西から）

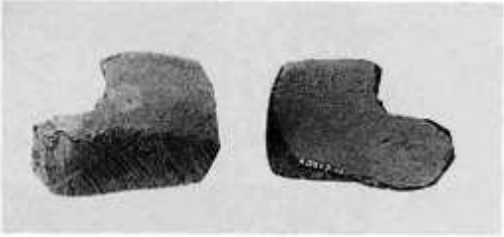
B区全景（右がA区、斜面部から礫がB区に流出している）

B区全景（西から）

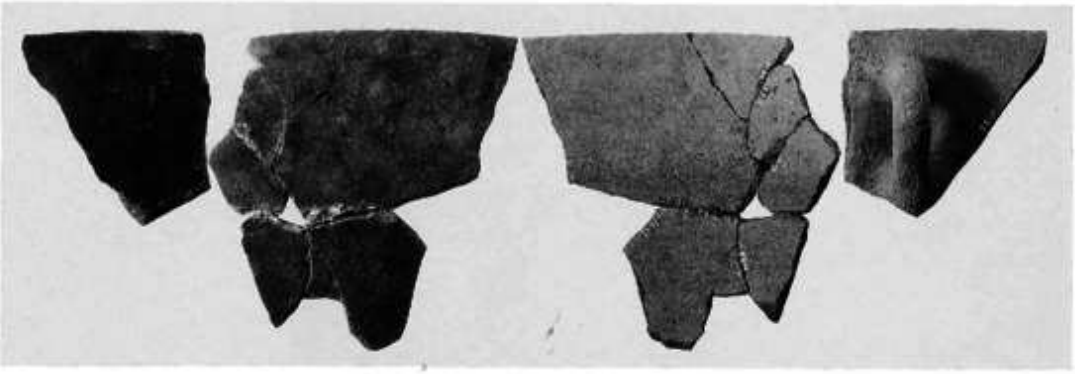
図版 6



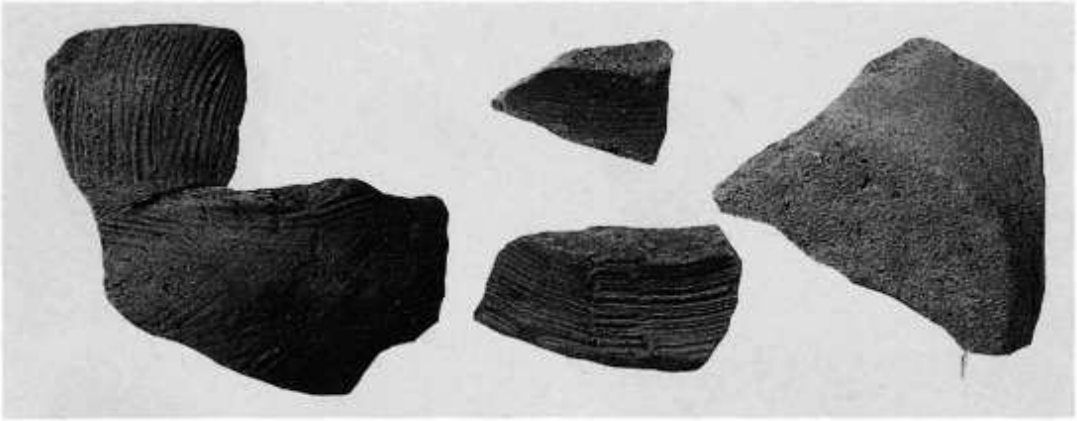
A 区表土出土遺物



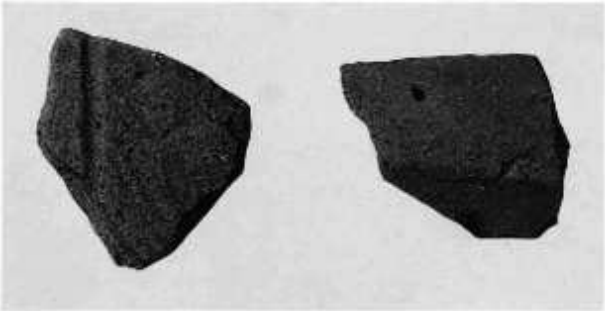
第 I 号竪穴状遺構出土遺物（土師質土器）



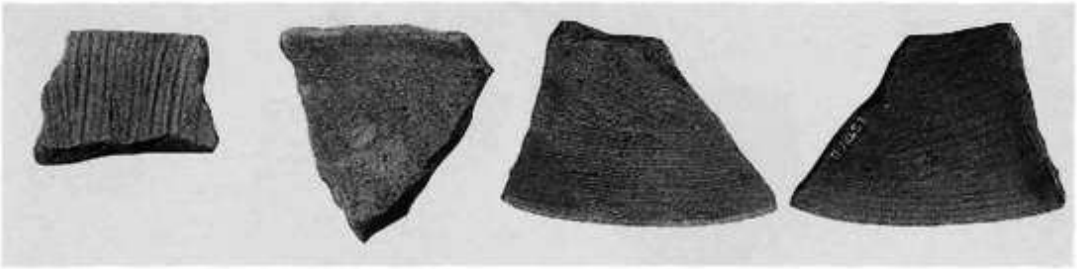
第 I 号竪穴状遺構出土遺物（土鍋）



第 2 号竪穴状遺構出土遺物（弥生土器）

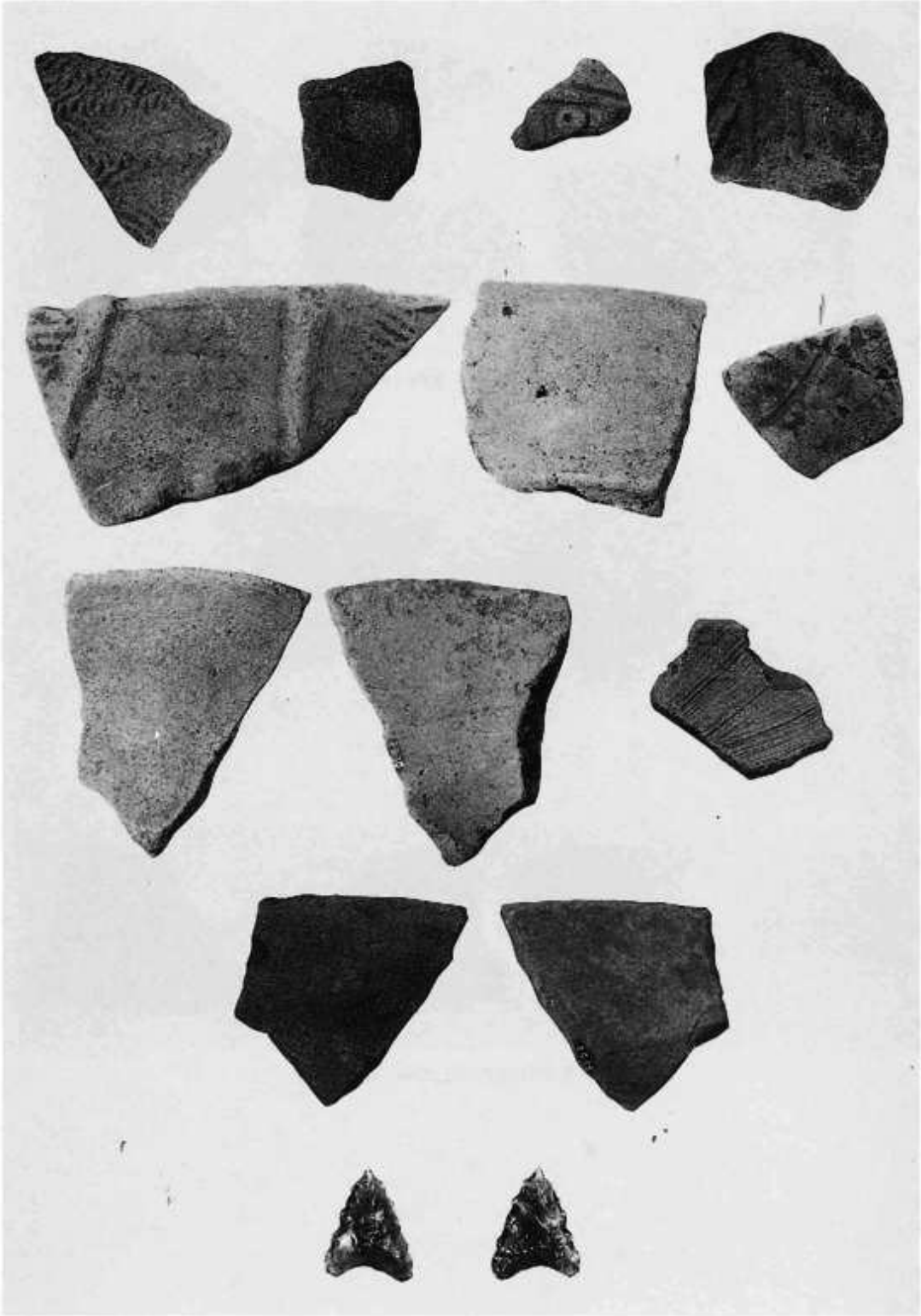


第 3 号竪穴状遺構出土遺物

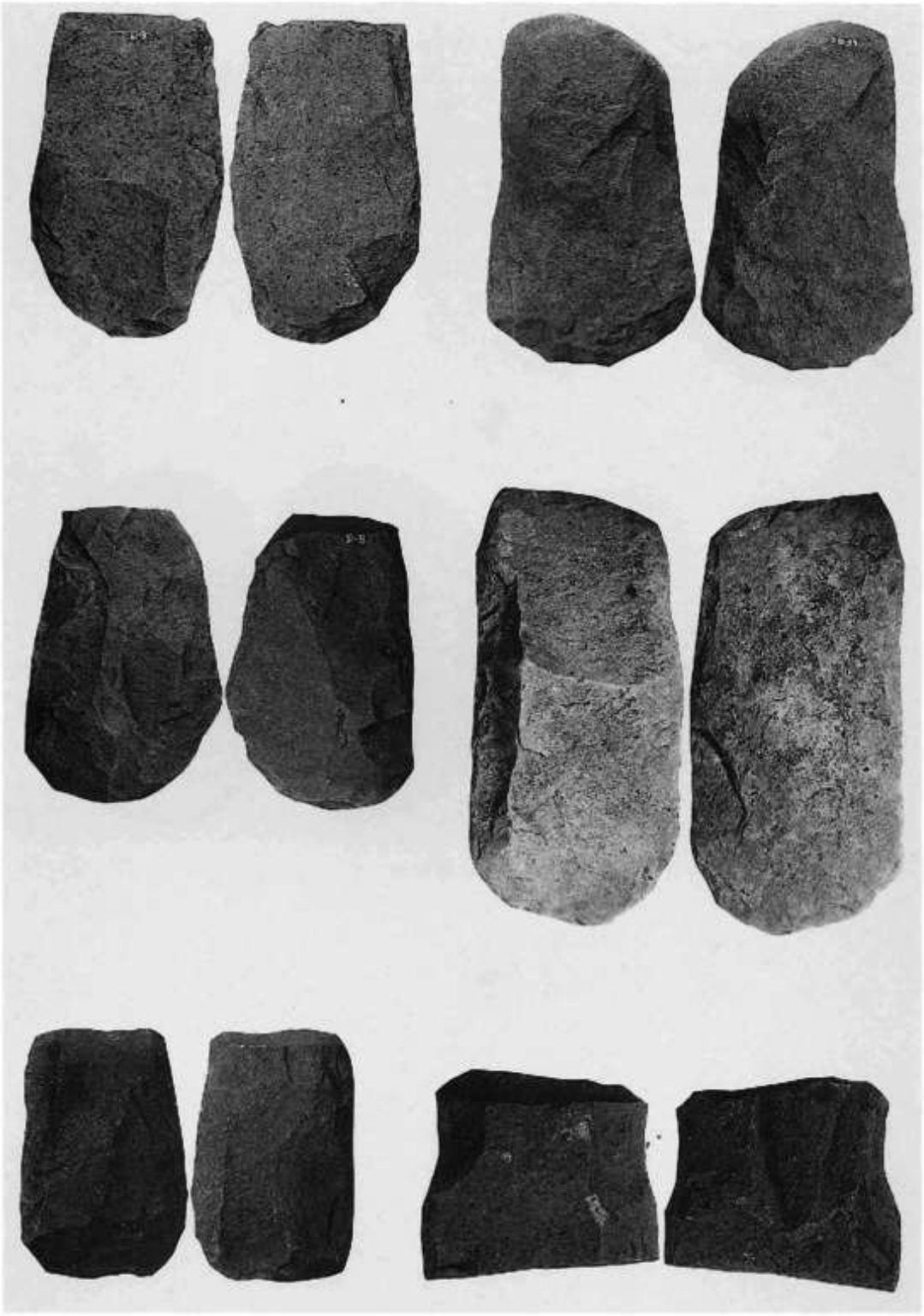


第 4 号竪穴状遺構出土遺物（弥生土器）

図版 8

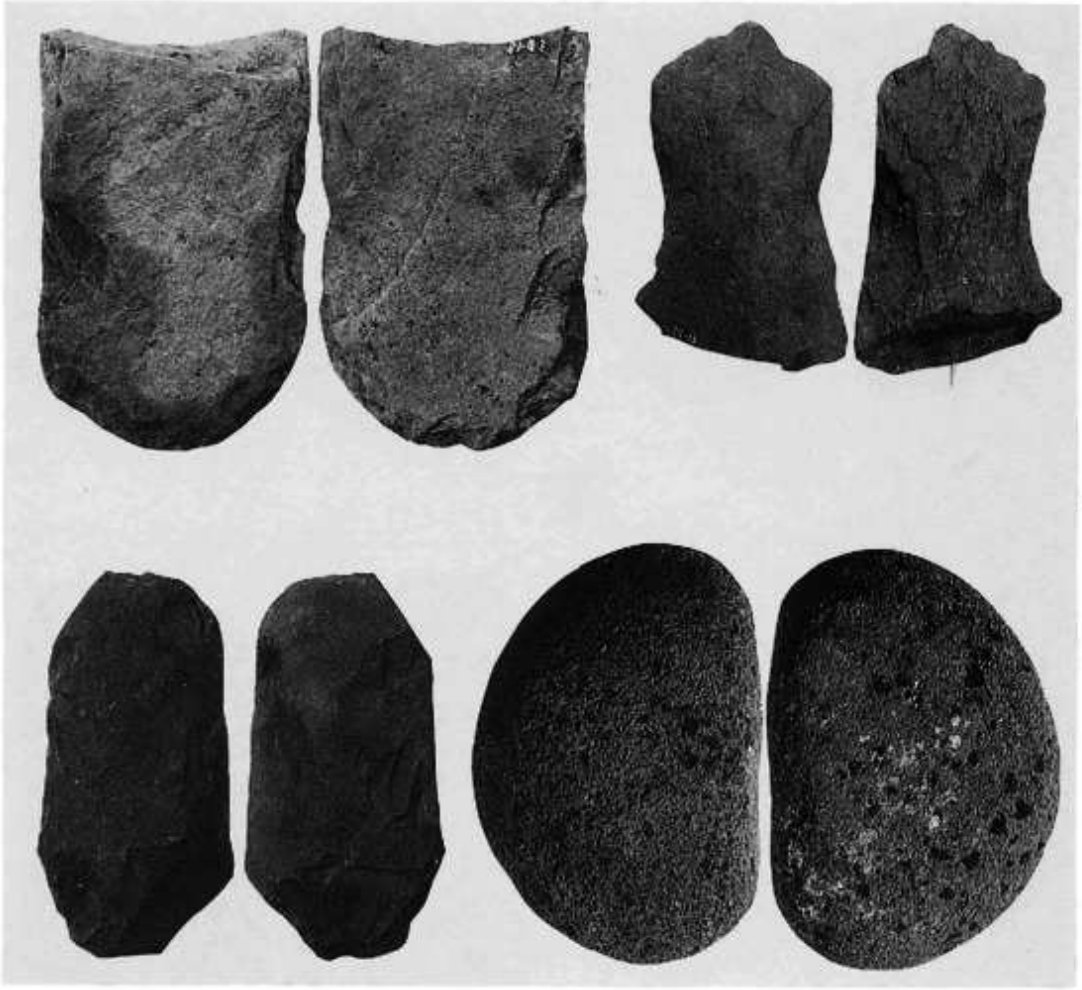


B 区出土遺物(1)



B 区出土遺物(2)

図版10



B区出土遺物(3)

浅科村文化財調査報告書

第１集　『土合１号墳の調査』（1993年）

第２集　『矢嶋城跡』緊急発掘調査報告書（1985年）

第３集　『五郎兵衛用水』矢嶋城跡腰曲輪部に開した用水路の調査（1987年）

第４集　『矢嶋城跡』第２曲輪部の建築遺構（1988年）

第５集　『矢嶋城跡』主郭部の調査（1991年）

第６集　『砂原遺跡』洪水に埋もれた耕地と古代の村（1993年）

第７・８集　『矢嶋城跡』村道２－８号線道路改良工事に伴う発掘調査（1996年）

浅科村文化財調査報告　第９集

御馬寄古城跡（みまよせこじようあと）

――村道北-50号線道路改良工事に伴う発掘調査――

発　行　1996年10月
発行者　浅科村教育委員会
印　刷　ほおずき書籍株式会社